首書
源氏物語
東屋
五十

東洋文庫

五十

○河　才世三　巻名さしもむろ葉やとをきめつもやのあまりかと母君そこさる
○花　宇治六　詞と哥とを以て巻の名とせり薫廿二歳の秋也
○幷　此巻薫廿五歳秋八月比より九月までその事あり

○浮くら山を　河　古今　浮くは山を山をを山ををまとも思いいなはさそうさりをり
花　筑波山ハ常陸国にあり東屋の君ハ常陸前司のまくむすめ也是ハ薫大将の心さしとなり上の巻のまよりをそ見るべし

○細　茎の上らうしき多き艸浮林ハ八宮のおむすめにおわれとて今の人さハなま女領のむすめにおわれハ文をつらにおもふんも必ろうしき名さちおへと思唯おもふ也

○まもやうよ　細　母の心也

○人のいかなる　巴按　海舟の姿也　又まろを

○うなの子ども　河　守子共　常陸なり　太守者為親王諸王置之親王任時不知吏勢仍奴々為守乃令勘吏勢ろく此故ま今の奴と守と云ふ又當国守ル人任時止大守只守ま任もろ例も有也　常陸上野両国之外親王不任諸王ハ宮達の子也

花　常陸前司子　藏人式部丞　源安綱妻　讃岐守妻　已上前腹也　藏人右近将監　童　安倍妻　左中将腹也

○ささ〳〵　河　次くもととつと同聲也　或過て

○とく〳〵　細　海舟ハ他人のとく〳〵とそろる也

○いそ引まれ　或按　母君の心也

おりて人のいなでのごくまも
まわろぐをもろをもろぐもろぐまも
うばなでよろづふおりのろ　かこ
のこどもいろくおうよまろぐ
あまこのろもひわぎことつ
きてうつわろぐおきたまき
かどすぎくまこのあうもれぐ
きぬぐよこのあうひをつぐと
人とおのひぐそろころのわう
まれいづひよてつきものおか
をもうとてひぐ川すぐれて
おりてじさなよおてもみえ

○ねろちの　細　海舟の名ろめれろ人き次は母の心をつくと也　或按　守の子ともとうきぬてもろう

○物なりこと　細　この字清濁両儀也濁儀可然如の字也

○うまきんこち　孟　常陸うむとあもあうとそ方くようい也

○ふるうて 河 賦

我ひめ君を 玖枚 常陸うひもの姫君と名付てそ
うつくしや

○上達部の 拜 常陸うひもの也うつくしもハ好うつくしき
まを 玖枚 ひたちうひもの親類さものうやや

○とくいうめう 河 徳

○ところの尺 河 好事者募奴銭帛 孝經

ふるうてをとめびさてうい酒
いもうとのうぎをおりつやうそて九
よそまつくびやとおもうれまりて
うそうつをまうぎうかしうみも
い酒さんまいあうぎうり上をア
のをうびゆてのくひものうそふ
さんあうぎうふうふうびあ
ばかびくうまそてまうひわうて
あのうちもさうくさくねさうび
よすこかしてこのさうそうろ
いあやうあうふあ岸びうんん
うつさうろうさうわうさ
あびよ

○ゑもと 細 初ハ奥列母さなへし

○かくく 孟 殆也 花 捨遺 東そやうさ
きうろんのふハうろうそてそ物ハひれれ
うろろく 河 妊也
○うううもの 河 豪家
細 うううをとハをうそうあう也をさまる
とハかあうう也もうさんとく
○もくく 花 全也

○ううさうろうと 世枕 むとめようをとく世房也

乃うろのそうろあうせうひようつも
もてでうくしをれびうやこうかと
ほびくうちゆうとのびくものあ
いふすてびこうやふうてうもを
乃あうろうろくうびつてさ
ものあうそびうあうびでいまま
うくいすまあうこうのあう
ゆうもうまあもとうもんれハ
とうゆうをんうとうくいる
るをくうさわうとうもいうそび
いさうのようこうしてうひつ
んびとびいそびうあう酒

○こゝのわたり哥合物がたり 河腰折 哥合 物語
合 庚申
○うゝそらんとす 弄 庚申を守る心
花 庚申経云 人腹中有三尸為人大害常庚申
之夜上告天帝記人罪過絶人生籍庚申夜不
寝則不得上天 許渾詩 年長毎労推甲子夜
寒初共守庚申
○らう〳〵く 巴蕉 をとこのむすめを
可然と思也 此段八中立のいとなみ也
○いひすて 巴蕉 福貴と合て秋ふさといひるを
○尤近少将 弄 大将のしたしくの子也 大将先祖不見
とはうわつかふ 尤近の第
○さう〳〵しう 或秋 此少将もうとゝなくて又心
安の上臈〳〵ふうや

○こゝのわたり 孟 妻をまさるなり也
○此君ハ 或秋 尤近少将也
○これうまさうて 孟 受領のむすめを誰〳〵
又のそまんと
○さい〳〵し 細 家中にすまひするを早れ聞しハ
さぜるもするとゝ
○此所うるさ 或秋 治毎〳〵也

こゝろひそよ　細　女の心也

○なぐさむ　或秘　浮冊の可然とゝのへ物也

○まさご忌　河　蒔繪　螺鈿

○地ぬり　或秘　浮冊の調度よりもる也

○あとゝろゝよ　河　うつりゆく心也
也秘　調度の中より目をつけしる躰也

○ないきうかう　河　内教坊　知安ゝ　別當大納言中
堪其道之人補之　花　内教坊ハ大宿居のかゝ
よ有也樂人舞姫ゝの有不也

○こゝの物　細　曲の物也

○ちとせのかげ　細　師也

○さもらふ 細 うかゞふ也

○わこと八 河 吾子 日本紀 我子 阿子 家子
細 我子とハ海舟うハところ〳〵略して娘ゝ也

○我心ひとつよ 細 母の心也

○人の心乃 或抄 大将の心中を心とする〳〵也

○ちゝうよい 巴抄 海舟の母が中立とゝ行ふ〳〵
ちやうゝゝ
○ゐひとゝろ 巴抄 海舟の父八宮うれい也

○うたんくの 乖 左近少将とさう〳〵のうれいう

○うゝゐひ 或抄 八宮のわひもうとゝゐひとゝ

○あやうく 盂 八宮のうす也

○ろうさい〳〵 細 ひもうとゝ也

おりのてがめうれいとゝ
人のまゝろよおもうとゝ也て
ゝゝゐまゝうひとゝ
うとのうをおもうひと
ゝまものてがうをおもう
人ものゐぶでひ
おくゝろうとゝがうひ
ゝちふとうをおやかでもの
おもうれいでひとうる
めうゐんゝとゝまうる事
ゐやとうのてうんおりふとゝ

○ありふくらくる 細 ありつくるる也又父のすを云

○此君の 壷 浮舟也

○物をもひそう 細 此女将のふくとといふ

○ありて〳〵 已抄 中立女将へゆきて也
○そらく〳〵 河 云〳〵シカ〳〵イフ 日本紀
○きこえあう 細 女将の気色也
○そらおもう 細 女将の詞

○ありてこ 孟 同事ありと学院乃世ありと

○いとなく 細 媒の心也
○そらくそらく 細 中立の詞
○女どもの乗 此中立をうくへいをうとし浮舟君のうつろひあるうつろひ
或抄 中立の我とうへうとこころの詞也

○あまこはまでおりみくだりいをものづくりおりひのづくりて
このころの中をのうんどうなる
ま西中をんうるみもうしあるこ
くいんでまをもをりひしまを
あづさゆみうつぎ泊とまて
ようづのつまさとうれ物
あるもしおのづなかはうう
ぞもんこばんとうのかり
うんうるべまてうのうをおろ
まこうりあうでこうくんと
やもうよ。うもあうでう

あまうこうみの泊しとあよ
あうどこうみまをうんまうづさ
つうおうごこあれどんまも
ををこうこうこうして。おうう
女人をようぶうんあうづさ。
ようもあおいでうびそう
こをつんうるのうまみよ。
いよおくなうて。こうも知
ぬんど。女どものうこうなうて
泊女どをはんべあしし
ま。まおうづひとあとおうる
ぬまだこのおこそ

○かのきん乃　也按　彼退也

○さかづき　盃ゆてもうすておかせられけれバぞ
ひされと中人もありしといふ也

○君いと　細　大将也あてやかなるとハ無興し
よろ為也　万水　よきさまハあてなるといへハよろし

心となり
○さやうのおほり　細　大領なとの聟よりおほせけるにハ
本意なりしとぞく

○おすすこと　也按　此同と内こよりハ已しもよそのお
わしハうき舟不ならくもよもの女と知ぬもん
知らよとてもへつらよるハ本の女をとのなむ也

○源中納言　細　両人まへ腹のむこなるへし　系図よ見

○うちもおさく　盃ひてうちまろむこそハいとゞ

むくつまごとへの子をもむへん
ともよう候ぎりはくるゝゆうち
ころわもとれさりのしるふ
ともろとへのかしうし給ふ御
ぶしうきてうきこもと女をおが
わりしばろさまて给ふバぞか
の色んの此はらつ画かん今
がかとの給ひ出しつかざるなり
しゆむ给ひうぐうきものにしなう。
さらふうびろつゝ給ふまじき
ともろうぶらわくくそれバ
るりのまそゆもそふか。きみおそ

やうあるねさゆそてさやうのおさ
りよらうさまうんへの女きゆか
さのこと取れいきやうお事そ
かしかおまくうかそておぎ見そ
うしろさらよづくこしてさん
わろむおふかしづくろうくまう
ともぶよのおばくるん今つれ
てんのらの盃づき源中納言
さねさのうちぶのあもとうくう
おきまそいそのうんおこゆきぞ
おさうそこまらう海まそまで
らんなんやとへむぜなるのべきと

○此人　細　中立也
或抜　心よう〳〵ぬく人也今の世うも媒の必あるべき也

○もてとよう〳〵ぬく　細　中立の羽

○もてさもう〳〵　細　弁うさ也實ある人

○中二めうと　弄　めでたき中也常陸介の子也

○いさやうへめうり　細　少将の羽
巴抜　俄よひさうへていいうれうと

○うんのあり　河　守主也　何のあるといふ心うつくし羽也大鏡するがうの主藏人うていうとうり

しくぢうきん人のれんぼううるをも世ますかうんうんとうもそおりひでめうとうり　かかうちのとどんくうんぬのねびのりかしきうのあてよえんうんぬをわうくやすくえんぼべし
さうもてさびうとみあうんぬのとそくいぬぎうくもなくんぬべとも
おばこそうちをんまこびさうんぬとうもがうてぬのほをとさんとを抜ぐうぬ也

○とうり　河　専也

○ろやひこのあり　花　ろやひハ伊勢物語のとうもあり艶うる心なうへし
○そのさうくも　玄抜　貪うれいうる心出あるものそとと

○うねよ　孟　此蝶ハ常陸未見也

○さいきよ　夜蛾　蝶の推条しるし也

○此ところよ　夜蛾　ひとちうの也

○ちくふくらんとくくるものでこゝもとゆるとくきあくびるゐはいとゝ我もさとゝ

○此くハ　花　西の方ハ海舟のる也蝶校とうくの妹さもしとのこのふりの海くまあるをうの四方なあるといつゝ

○左近少将との　細　中立の羽

○くゝひくゝを　細　守の義也

○此月下の　細　中立の羽

孟　海舟のタを北方とロさゝあくろう也

○内のれゝ　河　内旁の心也

○くんのとの　孟　ひとちの心とあうそるきかとうゝ中立の戸也

ちくふくらんとくくるものでこゝもとゆるとくきあくびるゐはいとゝ我もさとゝとくきあくびるゐはいとゝ我もさとゝ

○此くハ　花　西の方ハ海舟のる也蝶校とうくの妹さもしとのこのふりの海くまあるをうの四方なあるといつゝ

○うねよ　孟　此蝶ハ常陸未見也

○さいきよ　夜蛾　蝶の推条しるし也

○此ところよ　夜蛾　ひとちうの也

○左近少将との　細　中立の羽

○くゝひくゝを　細　守の義也

○此月下の　細　中立の羽

孟　海舟のタを北方とロさゝあくろう也

○内のれゝ　河　内旁の心也

○くんのとの　孟　ひとちの心とあうそるきかとうゝ中立の戸也

○世のさてし 或抄 世上よハ安のじこまるうてなるうろ
ひろやうよハ有るろ〳〵本の舞うそるうくてハとそ
孟ひとちのうそうそうき所ハ出ありてハ本の舞
うちと立るひのそハるろ〳〵ねやうるんと此将
ものありせるうと中くう語也

○てよさうそうろと 河 如捧手 掌上珠と云躰也

○物さうくうもれ 或抄 本の舞よめくされハ也

ろんおそ四でどうらじぐらのおう
うのうん一世のうこころるん〳〵ひ
ろんやうるのんぎろうのれもそ
るうろねやのうぎぢハそで
ろろのうこのでくおりひ
うづさそまろうてふさそ
ろでどおりひうひうろ
そのうるうろそるんさろ
うるまひくるまんぐりの
ろうるをふすめうのねぐひ
いあるでちるやそおさく
うまるまろでうまうて

○うーやうり 細守とあをといふ

○えろう 或抄 其事よ堪ろ也一本うくひ

○うーよとく 巴抄 別父の子ぞあると考へ

○ととの心さー 乗 始ハ手習君ととりのを又
父の子をといひて始より此女をと次将のひひ
分よつろかとよそそりの心さといふ
そうていふ也

○乃そもうてこと　孟　乃て某当こと此時のおか
でうてと中立の語也
○さこようろ　細　守の羽
○ねりよへさん人　或按　浮舟君のる也
○しくもくも　或按　浮舟君のるをハ母う守よハ
まうくなくと
○あのまゝハ　花　女子のる也
○今の世の人　孟　此しるハ有中に一段秘蔵
るれハ御ふまうつをそうさるも出来てい
いちまうくへも領状もせそもくと

○大将軍の細系圖不分明卅供将八大将軍
八代子孫ニて
○家の子ども 巴投 供将の父へ尽うと家礼
ちかう也
○うくさく・尋 廉ちう羽
○こころつさ 巴投 心付ちう也
○おりてき 氷 始奥陸守ニ成て又常陸守ニ成
てそうらう也

やとくもつくろふてそうんとの給ふ
うかうくありつかうをサねも
ふとをきそまうてハ古大将
なともとうとうまうほう
まうきあのそうてんさく
まうしおとうくおほう
まうまかりこころづさて
おりひきそんとよろうある
こうろうよりてまうてゐる
とうろのかでようかくちく
おばこゐうてんまうもう
まうかをかうれうろぎ

○月うろ 巴投 卅かよの志ま相違しそいうこと
ま也卅人と八許舟うちのまく又舟うと

○うろうこを 細 中立の心也
○うまよう 細 中立の羽
○すてこころ 細 守と云了

○かとうこと兄　花　家のやつよハ見苦せをしてそのあてうよ経廻をろ心也
弄　邊くさ也其邊をへつひいろ心也

○人くハ　細　是ろ少将とかめていう

○ろさ君ろう　弄　一本ろ君中立の利次将をこの我君といふ也
○めそひても　花　めそやろろとよ心也
弄　賓ろ人とかめろう
或抄　むさとよろうくたやうよろうもろ世上のろもろ知行よろ

○ろろろ花　花　孤露也ろろ子のやうよろの心方ろろ心也　細　ろろ子とハ我あり是も一家ハろろろや但此比ハ云我宜を守の利よりハいの心とありてまろくしろ

○ろくひの　河　今度　日本紀　細　今度の蔵人頭ハろ勅定とハいてこれしハ悉皆虚言也ようねのの人の模文をろる今もろ皆類有也やうの私ろ心と付へき故よりをろるへしろろろこそ　河　そハろろ好也ひころ好也ろろろ花ろ弄　此河ハ主上のやうよありせありうと中立の女房ろろへてひろろろ也
或抄　弄花ろ此中立を女とハいて利の躰とろろ男ろる人さを強不可及沙汰ろや

○我ハあれハ　弄　勅定のう也此ろ中立のうハむろくし不可説ろろ也

ろろくしさ　一本ろと人の　河　白人　諸本更也
巴抄　平人のこえよう勝ろろ

ものゝよい　孟　此時と云了

ひそまる〳〵　孟　中立の事〳〵ていふ也

ふうしろやきさ　細　蝶の形分ちいふ也
良秋　ひとりのあるようさまるとうそうとして

このてみぢかでものそこ〳〵
くつろもつおくみちらら
まこいでおそくおもひ
そろんあつまるおそ
人のはもとうまおかで
おりかそろんそれのそわの
ものはもくもでうな
うんとゝかぐ伯れでよ
とぶくかろはうひうぐら
ざものおぐうなんこれば
うやまことうよりも
ひそゆくまをおらひつぐらよ

ひるひさう　何雛　夷　ゆ平ひゝメ　松葉子
品ろのかゝ〳〵　細　守の羽也まくの比ゆかゝ〳〵
いろ世羽そろ

うめくもそ　巳秋　余字入ふ本もありめくと常
の心也うんまくまふ也

ふれバまてこ　万水　此時へやうへさ廿のる也

いともあさまくらのまびろうみな
てこうもそこつまでめうこの
ろの中くおどのそろりとか
かんこいかのおひうめぐ
のちはんかでもも
さそてもりまんこそ
かくかをうぬそとと
べさたそひわんぐてつまち
つまつもおりのそろめ
領一伯のそろぐぐそ
もまそろわそぐ今
でもおくはてこ

○ちうめう人　孟　如也　如常也

○さいくひと　手　次将のてあしもひまなくあるさまもあるひとひとく　物のまぎれ須臾せんとて

○いとこまやか　細　妹の心也

○いりうとうと　孟　中立り妹こめうこまやかなるさま也

君のうさ也

○いともく　或抄　めてたきことをいひてうちをとりもつ也

うをてよハとうとうさ也巧言令色也

○君もこゝ一　細　次将也

○大臣よるもん　或抄　次将心

○そくらう　河續旁　古記　権大納言去年獻續

旁申官そ　手そくらう清てうりう

孟　物をおして官ともくむるあり

○さてうの小方　孟　次将の羽也

くなりていりうとうともかくもあることもかくてぞおわるこまもうちうでまいりうんのいひつゝをいともくくもぞよめぞうしやりのてきこゆもいとをかしうらるゝでぞありけるいやの事でまうでうぶおとてきてあるじ大臣そうもんうくらうをいうんのどおまうやどろくしきこゝちうんこまりまうてそのこゝろの方のいうことものけやうのうんぶいうとうの

○引こんさん 盃 汐舟をこいで引こんでくるさ
ま 方の向こうといひまう〳〵侘人のやうな
ものぢやわいと

○いさやとおり 万水 小方いくおりんせんと 女
将 ひやかしていふ也

○うたよう 小方も 細 蝶の羽これもおりもの
なれいと

○中のこれな 弄 おい〳〵の中の兄といふ

○月ごろハ 細 女将の心は月代の羽よりくるくる
いつてゐるとの

○月をてる 花 是ハこれより後のタをまつ
てゐますハいまゝ此時まてハ女将ハきてくれる也
下よくくくくとしる
細 汐舟より約束せし日を不改して行也

○ばらもとも 細 汐舟也

○女将ともに 或抄 以下 母の心也

○ありよりもてきこえ 細 八宮より也

○大将との 或抄 君人の大君ともにかくりみとのほどよまいりたまへりのさまなど

○うへのことに 或抄 世上より八宮のことにうつる

○又もちを 弄 浮舟のうへの宿世を八宮ほめ奉る也と
さうん人もちもてあつかひさうしうをものたまひ物
ほめるさまと母のさまなどいふる也

ろひてえろよりかわるがわるいつ程
のみやうせんもおしくあてしき
さま御をおくれやまひてまもなくて
まもりておひろ給ひうしろやすかるべき
おや也どとやうおもこころもとなく
どのゝのおうんさうふもおもをかくこもおどろかさひそく
ざうまれど内くよこそく
おりへかりのをとさてうみのこと
ともおりひろぶまこぢち
をうごひうんへもはくおうもめ
おりひめぐさこそうかれおど

○めやすさ 孟 母の心より女将せめてと也

○女ハまして 細 守をうるもてうくいひるせハ
母のもうさおろうハてうる也さて女ハまして
いつ

○こるすうも 浮舟のうへ也

○とうりへさて 河 外うりへ来也

○我をいつひ 或抜 人の羽也
○わこの 細 我むすめをさしていう
也抜ノ我むすめのをさなくて浮舟へうつらんと
○人こゝの品むすめ 細浮舟をいふ
河用 或要 花 ようハ用也品のよきさ
ハうつくしうてわ心也
○とくかい 或抜 浮舟へハ専本意よめるとそ
うつくしうひろう活る残多さよ領状しろと

りかくいつのまにそ心とまてをおりしへぐてこのかをきゝ
くをうでんこたまひろが
おやをおくこゝろやさしさよ
めでうつくしうこのれむすめどう
せをおきてこぢわでやしくこゝろやさしさよ
をんなこをそいやうもがらをんなよがらもがのこゝろをみまうこゝおりひこにそゝまてこれにもてわいはしそかこ心へおりひろおひろ
めこのれいおかぐくおりひこ

○さうへハ出心と 或抜 少将の出心次第と
○ありつるく 河 無奥也ありつるくさ
心るり
○ふうめさわて 細 女ハ浮舟を遠変のるをそめ
てさう也
○こうるよ 細 浮舟のこと也

○物すごく　乗　如同也
○此君のゆゑ　細　浮舟のゆゑ也
○あやうく　孟　浮舟あやのまうまさめりくと
○あひくうろ　細あひてくに依合うろ類乃人
よりれハ我ハ口入せじと

ものさんのこころかうろぞの
まいもかごとやりひかつねも
ともこのさとのゆゑくおもん
人のたあいのうをもゆづ
つぐくとやりくあやかしうろ
あおづてまごおさおくやり
おつおんとさこてうくえ
やるべやくこうくうろさ
わうよんでこやりのまど
どうこのくおでくさとよ
やりのてきをうさそくめまこば
わさまうくわりくまうも女の今

○いそこうろ孟いろくも行きくと女の羽也
○うまうこれを　乗　手習君のやうに引うろ
まあうと又ものをうさまうりうろ葉うやめん
をうつめとく　或被　乱如判
○う心うろりくく乗　此将を与ひ初くうろ也
○あうれ　孟　浮舟の美人うろうも此此将の
心うそハうろうさと乱如のく

わうさ油をすべくかうろとよ
くうらいまでと与よいでてく
なうろうさうまうでわりか
ぶおとおなまうろいてかのとも
いとうだしうろこみをく
わうさ山うとくそ行うえもれ
さいまひまそたべてもも
ずくこうろうおくいまし
をうこさみかまこがかうゆる油
ともかうらべまいでさまを
だこうでもわうのこのまる
うんんまうんでもそまう

○ゐ列よりれ　盃　差そと乱ゐのいそ

○ゐふゐそろ〳〵　細　ゐの羽

○右の大臣殿　乗　夕霧　一本左

○ゐそちの　乗　紅梅

○式部々のみや　乗　さそろよう女房差のゐち
差をむこうとゐ〳〵人也

○内〳〵れうつさむもゐ　盃　廿二宮のみという
花　国史云正三位源朝臣潔姫者嵯峨太上
天皇之廿也母當麻氏天皇選聟未得其人大臣
正一位藤原朝臣弱冠之時天皇悦其風操超倫
殊勅嫁之清和太后其長廿也潔姫性能琵琶
頗可賞翫

○この母宮れ　或抄廿三宮ゐみやつ〳〵の分うえ也

○ゐみやのう〳〵れ　細　中君也

○物句りそ〳〵そな　或抄　六君のみうち也

ことばやの　巴扱　八官也

○人をもとうと　孟　八官の妻をめしてくるゝ
ことをおかさゝうとおもひしゝと

○ひようひやく　巴扱　ひようちうの也

○ようゝいうさき　取扱　ひようち遠慮するくと
ゝ
娘姫さまよ物ゐひいやしゝと

○我ともすてハ　巴扱　女房のことをすてハなや
のさうゝゝき有てもと曲めうもうさゝと

○いうて　孟　いやうもうくめうつをそ
ひしさゝ女と乳母とうそ

○世房をとるさま　取扱　海舟のさま也守辺

こりやくこゝろのせいさうの
てもこゝろよあらことをば
わきこゝろはよをもつかたこゝち
そてハゐびようこゝろづさ
人のゐやうしゐともゝ
かずかでいなひかでは
ちまち我力かるゝとゝ
ゝろづようふくこそつゝれ
いうゝくゝ今ゝからず
そをもんとゝぬこゝろ
ざこゝろそ世房のでるこよ
めやさゝあまるあるとこの狂

○やうて帳をとを　巴扱　多俄よあれ二別好と
をうとを西のさよ浮舟のとあよそうろ糸へと守さ
てつろろみ也浮舟ひろとを今不堅也

○さりろよ　幸あろろろ心也ろ

○さうろよ　或扱　賢良　百葉うこそその心也

○うろよい　或扱　剔子　二階　棚也

○ろよろさ　孟　小方ひろみろかろそ心ろれ也
○れ方ハ小ありそよ　幸　未の刻よ十五六の程とい
常陸の廿九夕也　少将よめくせんとをろくく也　又云
浮舟とい一由如何　私浮舟可然ら
○人のれ心ハ　細　守の詞

○母うさ手ハ　孟　世よ母のうき子もめろかとろと
れ方の今九ひとあをろうろろ思を恨てよりや母
うさくくもそろろうれいとい一也

只まてどちらまでとうのてし
くびてよりよくくはろうさまこ
おりてよみろうくの仕ろろ
ろうとそろてびおびて子
なれいろともろくちひ
りろちろでとそおりのいつま
さ一ひ母よりあさこいふやや
いあろそひとろをうろう
めのとろふおでうろい
れいろをのあひぬさめ
のをとそひとちやふて
らろあろ人のろろらぞそ

○こうちきのかどもとゝ也袂ゝこゝ也

○うちよりへ乃 巴袂 何う白守う羽也

○てとさなよ巴袂 泊舟へとゐそれうをとうやうをまことを少将をハ我もくとむこまとうとうこゝ聞かうなへハやうさうとゝ

○男君も 盃 少将常陸う不をいう名ゝさ不
とゐひて来也

○その夜と 細 こゝそ祭り初う

○宮の小方 細 中君也

○うのうのと 幷 常陸の小方ゟ中君のうへ乃
文の刊也

○とうろへ 細 方うへと

○まろまん 巴秋 是まて文言也

○こゝやの 細 中君の心也

○あまれん 巴秋 世ふゆきの躰そとゝんも
孟 溢也

らひおもふこゝろのこまやかなるをいふ
てゐともくうまてこんなんすなるこゝろのあらはなるつのそよろつ也
あつまとおもふ事なるものそやく仕なれはおのれ生るこゝろのはまづまんとうちおこすこゝろをおもひまてとゝまりてこゝやのさうゆうしてやうやう人ことにまじらふのうへ
こゝろこゝろもいとてまく
みつからこゝろさしまて世おわすまんもおもふ事をいふ

○うちとけ 平 中君も物ねたきさ躰也又浮舟
をやうかくんとゝ
○ゆきゝ人の 或秋 故八宮のゝ也

○こゝろ 細 こゝろ成世房こゝち也

○さうやうてそハ 細 太輔ゝ初也

○うるはしの 巴秋 ねうし腹のあるこゝ世ふ
ひとゝ

こゝろうるはしくおもひとることなくてこゝろのうちうるはんもあるさ人のゆるしあるこゝろうるはしさをおもひうるはしくもあたゆうにもなひとゝこゝろうるはしくもまうひやうやうに見ハ行ふ人ゝまてうたかくもあるかな世
こゝろやうのものゝ人の仕ほねおりもあつまりのものゝめまうひとゝふくのおう世てまやしきのみのあとをとゝめてさへふのみのこゝろをこゝろうるはしくもあて

○いろうけ　或秩　太補ノ逸ノ字ノ誤也ト云ヒ
　ヲ奇麗ト書キ
○いとうわろ　細　女ノ心也
○れうと　手習君ノ心ヲ云ヘ

○いうくうの　孟　常陸ノ何ヲスルヲ云ヒ
　トヨヘトヲ田舎人ニテ其筋ヲ云ヒ
　ヌ也
○あつまさね　花　東絹　見善相公意見
　ウカ藤原君ノ名ヲ云ヒ三井ノ名ヲ云ヒ

同条使ゆらめきてうちこぼれたるあつまさね一箱
ととあるをや一箱

○君といと　或秩　少将也　富貴ヲ云ヒスルト也

○れてい　巴秩　坐居外様ヒサシヲ云也

○須次納言　手　前腹ノ人トヨメル聟也

○あのうらうら 巴秋 せうとハひとりゐ給へる住也
○此中方ゟ 花 西の対方也宮の姫君ぬしのかと
住給ひしゝ也

○名やとハ 細 君不ゐ給ひゆへ也

○此ゆゑさ哉ゝ 細 浮舟の方ゟ親類うちとハいふ
そへ人のあるゝとゝひゆへ中君ゟあるゝまゝ
いふ也

○ことよゆゑひ 乗中君のゝ也
巴秋 八宮のゆゑ〳〵浮ハさりしゝまゝうれしと
○乳母ゝゝ 或秋 中君の方ゟ人〳〵也 隠家の
うるれハ也

○人ゝゝとゝき 万水 二条院ゟ浮舟をとり取

○まいる時ハ 乗 浮舟の母ゟ中君のもとへまいる也
○いとあつまり〳〵 細 中君のさま也

○うゝやまう〳〵 孟 中君の躰をかた〳〵やむ也
○我とこゝ方ゟ 花 故宇治宮のかた中君の母めいな
中将君ハあるゝ也中君とハ母方ゟいとこなれいふ
ゐ中とハ云也 或秋 浮舟の母乃心也
○ほろ〳〵まろうと 乗 かた〳〵ゟ成行と宮つかへのち
ひろくなる也

○こゝよハ　巴扱　注舟物忌といふ人不通也

○こゝひハ　乗　ひとちの小方り白宮とゐる之塔前也
ゐてゐや
孟　此度ハ心静ゐ中君の躰とゐるし

○我りとのり人　孟　ひとちの小方心也

○我ゐてこ　乗　常陸ゐ前膝ゐるべし六位蔵人式部丞ゐをゐるゐるべし」

○物ゐもゐ　乗　中君のゐ

○ゐゐゐよひ　乗　芸州ゐるゐとゐて与心
よいゐゐゐていゐゐさ躰をゐれゐゐゐゐゐ

こゐのゐゐおゐゐくの事
どもなどおゐゐどもゐど文
ゐゐゐの立ゐどもゐゐ生
どゐゐゐゐゐゐゐこのさま
のゐゐそゐゐゐ月の出度
ゐそさゐゐゐゐゐみもゐ
まゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
をゐゐまゐゐはなゐゐゐゐ
ゐゐゐよゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ
ゐゐゐゐゐゐゐゐゐ

○七夕八月河古今若りきん心うつさ七夕乃
年に一度あふ人乃

○もろ君いてさて 弄 白宮乃いてさ給也

○まひす 或板 白宮よ中君相應しろ

○こゝやの 細 八宮也

○わさもこよ采かうさ袖ろ
をそれば たるのごとごろそも
あやよみそまろうのうな
いでるごまつごろそよ
ろごとしごさてうろまず
あまろごさまをとごそ
すろをそやてあごやしの
にろろごまてきろかわ
こそのさびくもろ一はる
をおりらてづろよあまてゆる
ゆまでいてまのさつごふれ
それ

○ふくまろ 或板 名ちさそ 対面ぬさ也

○うをくしさ 弄 受領うをく

○我ひもあも 或板 海毋のう也

○いさりひと 一本 ゆまさいさりひ

○うちやの 盃 ひろう心と我世をハ后ろ
ひへとも我同膜ろむもれまれとも海舟ハて
あてし毋の乃へ

わさもこよ采かうさ袖ろ
をそれば たるのごとごろそも
あやよみそまろうのうな
いでるごまつごろそよ
ろごとしごさてうろまず
あまろごさまをとごそ
すろをそやてあごやしの
にろろごまてきろかわ
こそのさびくもろ一はる
をおりらてづろよあまてゆる
ゆまでいてまのさつごふれ
それ

ろうごとハろうと人今のろあご
もそあろびまる人ごまろあろ
まてごろまよしそやのごう
ろうはごろまつろろ
つのまろこうろとまる
ごいろごとをうろとそ人
ごろくこうろうろ
やろくとりのかうの見ハ
ろごもあてさもへ
うんまろごいかの
そのそうのうろ
あてんろごやう

○るを今よりの事海舟をよろこぶ人のふかきを
もてい無念なる人しこと

○あまりよろこび或秘事人は乳母などもする也
上達ろうもいまだ二心ありとてとりひしぐ
る也

○さいの名 或秘 明石中宮也

○そうとうさ 細こうとうハさしぬきとて
心也伊勢物語の心ハくわり

○なをさいさてさらさ 花 北山抄云外衛佐等
任意不参之近衛次将帯釼上殿無妨仍宿侍之
時副於宿物持上自余不能持上
晴蛉記 馬頭ハなりとうる直衣さらさ例
のなるれと赤色の扇ぬれてわらひて
○りさそこの 細 中君なさつぬ女房ち此
次将をみていふ
○此ちさ 五水 海舟の事也

○うきふ 舞 いさ生長せうろ歟也
花 ろうろうりさやのうへのりをうとうとむま

○いと世はめづらの世秋 浮舟のさうぞくなどを
守のさうぞくなどいとみのこと
ハ少将君などいふ

○さうぞくも 細 女方さうぞくなどいふ也

○いづれ〳〵 或秋 白宮と名をかりて女将をなげ
ぬ〳〵ころ也

○心ちなどいと〳〵ハ 細 白宮の判明石中宮などの
〳〵ごとまさなどいふ

○ものゝまぎれ 白 世秋

○出ぬひの名残 孟 白宮と書のたて号

○女君のおとゝ 細 女小方のまぎれなる也

○み中ひさう 或秋 中君などいひて白宮のさう
かひろハみ中ひさう也

○こゝの 細 古の方とをり

○あさうさいかと 弄 中君のタ

○さる山ばところの 世捨 葉ハ不及是非山ばと
のゝ人けあるうへめんこうう〳〵
或捨 ふしの幸ある山もとせめん山中そ
うくうろうろ生出ゐ〳〵
○こひめ君乃 孟 大君ゐタ

○世の中の 孟 中君の引也う〳〵〈てあれ
うもあうこと〳〵〉

うのうひまでおりひ
なごころはづさやもあうこと
うへのこもるもうぞども
よをとてまうもうぶ
ようのひるれてだ
そまうそなうめもれば
あうをるこの世まつう世
ぞいうでこそあのろづの
てふこうのうわうれ
つてのうあさうの世を
ひうるようもそもこそうら
ゐのうさぐう

○中く世の常よ 世捨 世君ハ人と父宮ハ世
うれハうよと〳〵

○あうと 世捨 うくうろうとうと〳〵
のうれうまと〳〵

○六将とのハ 弄 ひうちの中方利

○せうれうも 世捨 大君おとゝさへ二宮うもせれ
ばとゝ
○ほうやあうのりの 細 中君の詞也我身も六君よ
とそれうう大君もうう〳〵ばかくてあるべやうの
身うろくゝとゝ

○うの君ハ 細 芝ゐ也

○うのるうう 弄 常陸也方言
孟 芝ゐの浮舟と大君のうううう 手尼との
ひゝとゝ

○ゝりとゆうよ 河 堂の一りとゆうよひうさの、草ハえ
うう〳〵哀とそろう 細 ゆりという

○兵将のもひ 孟 人をるさ心うて遠慶せりと

○あまうるて 盂汝舟と出家よるてもとん之

○もよ心ろるさ 弄 中君の初

○人よあるろる 細 をいえるるこのるひと

○ろとん 或抄 絶男んなと又石堪也

○ひをよろのさよ 細 中君八宇治よ絶こりろくさや
うよ父宮のおひをさ引ろ多ろく成ぬと

○まうそいと 或抄 汝舟の出家いあうもうさるると

○わひろろ 細 安小方のさ安也

○こ宮のたゝう 孟 かの方司也
或抄 浮舟と八宮の御子ぬつるとのたゝう〳〵事也

○うさ嶋乃 河 後拾遺 〳〵とをもふ人の心とうき嶋の
あやうさまてをねとゝ乃たゝうか
花塩うらのまくらさうさ浪のうきてぬるひの
おほつせをりをり 今案常陸国ゝ信太の浮嶋と云
所あり是と浮嶋とをやゝ塩うらの浮嶋ハ奥州也
それとゝ云るや 弄 常陸国ゝ有ハ信太浮嶋と云是
ハ陸奥の塩うらのまくらとうたふ浮嶋也ゝゝハ
奥州の守うゝ時の物語也
○我身ひとつの河 世中ハ昔よりやうきをや我身ひとつ
のうきなるへきたゝう 六ゝの我身ひとつ

世をそうく乃たゝう
○浮〳〵山の河 つゝ山ゝ山ちをやれと思へハ
さゝくるたゝう 弄 常陸守うし時の物語也
○あやしのものとをも 或抄 下しもの歌んと

○此君ハ 細 浮舟也

○をそろ〳〵 細 中君の心也
或抄 浮舟とろ〳〵てあるてゝ与語也
○うとうとも心あも 孟 浮舟也

○うさ嶋乃 河 後拾遺 〳〵とをもふ人の心とうき嶋の
あやうさまてをねとゝ乃たゝうか
花塩うらのまくらさうさ浪のうきてぬるひの
おほつせをりをり 今案常陸国ゝ信太の浮嶋と云
所あり是と浮嶋とをやゝ塩うらの浮嶋ハ奥州也
それとゝ云るや 弄 常陸国ゝ有ハ信太浮嶋と云是
ハ陸奥の塩うらのまくらとうたふ浮嶋也ゝゝハ
奥州の守うゝ時の物語也
○我身ひとつの河 世中ハ昔よりやうきをや我身ひとつ
のうきなるへきたゝう 六ゝの我身ひとつ

世をそうく乃たゝう
○浮〳〵山の河 つゝ山ゝ山ちをやれと思へハ
さゝくるたゝう 弄 常陸守うし時の物語也
○あやしのものとをも 或抄 下しもの歌んと

○此君ハ 細 浮舟也

○をそろ〳〵 細 中君の心也
或抄 浮舟とろ〳〵てあるてゝ与語也
○うとうとも心あも 孟 浮舟也

○うとうとを 或抄一うと有也うとうとうとうとを
いう句也

○むこの人 孟 大君也 或抄中君の心

○ものへことりめる人 孟 芸也

まづうれしくおぼえたまふにも
もはづかしくつゝましき御ありさまのうち
あらはしきこえたまふべきにもあらず
ちかきほどゞ人づてもいとまばゆく
うとうとしくてやみたまふべきにもあらぬを
そこはかとうちかすめたまへるけしきも
いとしるきを人ゆるしたまへるにや
かゝるまでおぼしよりけるこゝろばへを
聞つゝひとへに

○かのうとうとなり 巴抄 女房方のそと人うとうとしき方よ
うとうとし也

○えんやのかわりなる 孟 白宮のうち

○えてそさこと 或抄 ろをいろんとも定めていふ
○いうとうとの 一本むこひかくせてさまいうみの
細 白宮の中君さうむこひてかくせてうち也

○うちまもりさまそ 細 大将なれ共随身のさまを
といふ

このまうとうとのことをいそてん
よそまろん ありふかんとれまろ
きん人のいうとうとさおふかさこゝろ
あまでとえやのかわりさ四よを
えあてびおうとうとびまて
さぶぬくいまえとそこえ
さうとうおくぼえおうとうとい
かなん人ぶまをもちとれまろ
うんうとうとうかとよいまう市
うりおうおうもまとうとうとう
うのまでそのとうとうとう
とまろ人とそうぶうとうとう

○ゐりをること　弄　實ハくるれハ也

○もろよ　世捨　浮世の世ハ方をよう〳〵そもろ
うきハ鮒〳〵見ゑよ不入ハそも也

○うちより　細　内裏より出給ふ人〳〵し

○うへさまいの人名乃　細　堂の司

○乃やうちの　弄　后宮の御方より宮達の乃し給
ふをうへさまの給

○宮のやうろよ　畫　白宮の代よ祖假仕ふ〳〵

○ゆわやまち　細　白宮の遣ゑしたつハ中君ゑや
まちと〳〵

○きよをろろを　攻秋　白宮の代よ物そ〳〵きよろ
浅〳〵さる物ゑと中君の返答也中君の御ゑまち
との返答ハとうあひ給ふゑ也

○乃やいうちより　細　草子地也

○ていうつの　攻秋　大君のゑ也

○さてもいて 或秘 中君の心也

○いひわびて 已秘 名残すくなひとそんじて 芝の
大君のゆりのすけくの給て中君をすくへんとの
あること共也さうなく岩木をすねい真實大君
のをもふこころさよ中君にも種こ兄弟として心のふし
中君又もうの給ひて

○いとをしうすねい 河人非木石皆有情 白氏文集
心非木石 花仙窟

○うき世の心を河にたとへしこと也 川ふせ
神いうをもとうよきうか
花 又そさいふ人の見ひをやむるそ人也 後ふ文人
うととうるせい手習君を故姫君の形代として
芝ふ又在をもんと見給也
○うの人々 或秘 浮舟のうき也
○いと長のて 万水 浮舟のうを芝ふよう給也

○うきもすくての 細 芝の心也

○いてやうの 花 芝の山里の本尊ふうしいのりを
中君の佛とうんとの給ふう 舎木巻ふ有る也
已秘 芝の河也うき舟のさいさきあしき也
○ふさく 細 時くのやうるくへとろくへと

○うその巴渡ひとり心うしろ人なき中君乃詞也

○いてさうハ　細　茎の羽
弄海舟の女よつて人疑ふこと　巴渡海舟に似たり
○れのうきを羽　細　大君の中君よりうき事よ似たり

○ろくの人の哥　茎也　弄うて物といハ人をこの字也其をうて我身のうき事をうつたへうつてうき物なれハ也こゝろにせくといふハ君のう也
河　人祇　祭祀具　撫　惚
○例のうつれよ　或抄　真實よハゝひうつゝなき体也

○れうさ川哥　中君也　弄　うきとりのうれハなく浮てとゝまり浮舟のうをうしろめたき也

○引手わたうさよ河　古今　大うさの引てわたうさよ
或抄　浮舟のしわうのろうそのまさうまれ
浮舟ようせい　茎の羽　河　古今　大わさと名よてゝそれうれてもつのようせいありてものを
或抄　浮舟よつ舟よハようんとさゝとい物論と
○いとうみとさ水の　弄　茎の身を觀ぜん也

○うさわのうさう　細　わううて中君の茎を捨ん
○うつゝなきうと　細　中君の心也

○ううわよ　細　浮舟の女ける也
或抄　中君の羽也但世句もいまさ心をうつゝなきうとゝうつゝなきうの句中君の句うへし

○さうへうの　細　茎の羽世心をうつゝなきうと

○そこをも　細　妻君のゆゑありそうな
と
○いとうめくく　弄　芸のこいちるれわう
をの詞也

○めのしゆうな　弄　よて八乳母のうつをよ芸
へまのつせ此へるをいひ一を号ひいうをうしうと
今乃名をりてめそうる也　取扱　妻君心

どくあるをよ二ゑふかな陸
うありしかすまうのおろ也
もくせ此おひてだらたかぎろ
ぎういそいてうるくく
あるひまて伝男いおおでも
おそ向きまでなんとくろひ
きことまでいでおろう
このそくだいとめでくありふ
やなるはき向うおくめでくめとの
ゆろうふおりひうてよびく
いひとをおるまでさよおうひ
しどこの広あろさ海をよくまお

○天の河と　花　あをそらの巻よ八白官のそを彦
星よさくていてうこよ八芸大将のそと彦星が光と
いう上の羽よ八七夕八ろうそもやうよ乃をりうよ
うんハいとうくくさと中将君の中君れるとよう
男をハ彦星とこの女をハ七夕という也

○えひとろさろ　花　東国の人と云也

○少将と　孟方の心よ内中のやろう少将をろう
くくろろよし悔む也

○ううの於くろ　河　ろさをこうきたハろうのま
ホこうろもむろうきゆろうこと八

○時く　弄　打くく乃心也とろくくうの答

○経うこと　河　若有人聞是薬王菩薩本事品能
随喜讃善者是人現在口中常出青蓮華香

身毛孔中常出牛頭栴檀香 法華經

○ころせんこん 花 權記 長德五年十月九日於山階寺拜見牛頭栴檀等

○佛ハまことを 花 經云 實語者不誑語者ま

もるひも 或抄 菜玉品の心也

○そろよろづを 或抄 如方也

○君ハ身ひて 盃 中君へ菜の海舟ゆるを身ひて
のあまれハ方よりうき給也

○ものいとめ 弄 菜の性を云 或抄 是も中君引

○きよ〳〵今の 弄 内親王とひ久給ふ

○世をとろしさ 細 尼うもとくきといひる也

○ほそきめ 細 女の羽 巴抄 ひとり方うへのう

てくぐくのをだまきくわうよ
もものかうづきをやしでるき
ちよ佛のおきひをねうも
ところなりやくまおでよ
うちとうへのおつくみばせんん
ちやおどろくきさらの衣き
どまづのちくつまひ
おへばかまよまよおうと
ん衣ゆきおくあり
くるちおひもいでしし
おひもれいかおでみまえ
さきの世ゆゆしおまる

○鳥のさを　河とよむ　鳥のこゑもやまねゝ
ゝさ心と人はきゝなすへし
巴梭　あゝ山〳〵と思ひしにこゝろ有てかくいへるの心也下つ人までも芸のあり〳〵ハとそ

○まいてそこゝろ〳〵人　盃　我こゝろよりそこゝろ
浪舟ハとそ

○うとうとしねる君よ　何ごとぞ君よハ思ひのまゝ
うゝ人なるこゝろそこゝろ　今ハとそ
草のまことそこゝろ人の心よまことを久伊勢物語

○うこゝろをこゝろそ　或梭　嫉妬のる也

まてのこゝろまでこゝろのうつりかはりやすきこゝろ
ものこゝろさうし
○いさやこゝろの弄　芸の心をいふこゝろ
ねゝごとをこゝろにて行末のこゝろまでハこゝろ
○それりて心は　細　中君よまこと也こゝろ

○車のこゝろ　盃　ひくちのかゝり方のむこゝろ也

○うつしきる　或枚　四方行

○岩かの中よ　花　古今いくよ人岩かの中よまし
ハくハ世のうさうきてこゝろ
弄　世をうむとせんともよゝまれなまりせんとも
ありひめうまへし

○洲流るとも　細　浮舟也

○車引いる　細　女中方のむかへ車也

○車うつる　弄　親王車事也枚よりまへの時
ハ毛車そのかへしかりてとハ車にて出給ふ
ふり一網代車ありへし又女車ハ葉うと

○うるはしの車ぞ　細　白宮のとゝ迎へる也

○ううやうそそ　或枚　白宮の心

○このそ 弄 白宮のようさ女房など常陸殿とこ
ろを殿のなどをうつしいる也

○もよこのうの 盃 中方のさて与
○岬のさを 巴投 浮舟のる也

○さうし兄と 攴投 浮舟と平人(よハ乃毛と)

○ひさちとの 盃 白宮の中君へうよ 攴也

なだーろもむろまでーぶち
ぶのくまでで女房などもとうろ
やうのかぜんでもうのようあざ
やうれしうひあうをさむ
ぎかこうあの男のなどやとうか
しくおのふそでこの内うこのと
をおよふのつぼうをのまもんで
しくなる面かしくおばしくる
まてさうじことをするをくしく
やうてこん事いうぐわう
しくやうしあうのふまうあのて
日ちぶのようふんやこうみよ

○車そひ 弄の中ひわうくしき車をのるうと
の攴也 攴投 りうきこうろうろうろ
うくおひ攴也

○さうて 細 中君心也

○ふるう 細 さうて投女房也 中君羽

○女ちうて 攴投 ひうちのをと太輔うなち
との攴也

ふこうあうわうぐもよいうざ
あうう事ぞひかぶこととさう
めまてうんこうまこかぶおをおが
しうぶのてのまふやまて
うらいうこともがしてさらん
ぶぶつくそのうがだちまて
あうろん人いとよい面あうしも
又とぶうをゆくこびよも
のふひなうふん人のまてうぶめ
けべこととをのこうひおうあ
ふとそふなふてぶこちら
うひさおもううびよおう

○るさ名八 河 おのうんとうめうすも有物を
なさるそうそうようもろふ
攴投 この心八てるさ名とハうそ攴ととう

○あるころもちゝ　花　玉もてあそぶのごとし
ものをゆあみをするとやひきをさや
細　白宮のころもをそあらひおくる也

○ひやうさう　孟　白宮のちんてんより中君へさ
（ゝさう脱也
○ゆもち　花　沐浴もち
弄　もてあそぶ

○ねりあひさ　敢秋　白宮の中君へ童してのおくり

○きよめ　細　あらひきよむる

○きよ〳〵さハ　弄　髪あらひ身をきよめさう

○九十日　花　九月八日九月をそ
もてあそぶ　長月ともじへし

○そうさう　敢秋　中君のゆもち給ふをよく〳〵有也

○きいなむ　敢秋　浴舟の童をもてあそぶ

のかたへそんらうあるをさうさうしくそやおもふらんとやうんぬ
給ふ　ぜひおもひまゐらするまでなくよそに思ひたてまつりおやう白
よりもおもうでも給ふてふるをばこの月八日九月八日の十月八日
そうさうしてつまもつるをそたらひおもうでふるもねんごろにうるさくおもふらんとやうんぬ
わろかるべきことなれ給ふてよ
給ふてよのうちにもあるさ
いのうへにもをいてもうさう

○引さきて 或捌 引避也

○もよろくて 河簾

○ちとん色の 或捌 浮舟の衣裳也

ゑごゝろもなくてさしのぞきたるほの
かにみるさしのやうもあよわゝさ
らゝかなるかほつきよりはじめて房風そ
うのつまよりすそまでなよ〳〵て
そゝろこぼれかゝりたるやうもよ。
世尊寺のをうらのこゝろもうさ
もりて袖ぐちまでおう房風の
ひとのこゝろもれんちうこゝろも
わかくてゆるいまいろみれは
おしこめもうとおぼえてこの

ひとをいとうみさしをいてゝ
うよをわをゝまのそやをう
あをこゝろもとゞめんとすることの
のらうのあつの法が世んざいのこと
ゆへうらくるさみだれうち
よをかのまうくるゝ
いとゆふくれがたうちくるひて
うぐひすのなうくおこさうさじ
をみおこしてわをそやうぬ
乃つまうのこのうよやうは
やりひもをでもいとうるさ
ゆねうくもあんとゆひて。

○これをものうてて 盃 白宮の羽

○さるものくつる 葬 白宮のる
巴板 白宮在のるく顔をいろく作也

○大将るや 葬 うかとくく浮よりて董るや
うくひしく 或板 浮舟の心也

○あけし 或板 浮舟の乱毋也

○こきいいるる 或板 乱毋の羽

○うちつきるる 葬 うちつきるれども好色と馴
しる宮なて羽多くの作也

このごろのうちのあそんの
女房などをもてあそぶ
なる房風をもてあそぶ
こと也いるるとをもあり
ぞくくるつきものぞれ
じ。このもものろは申とおれば
あるやうやうのくまでよろしれて

○いまゝでこゝにこもりゐて常の方へもえ渡らぬ也 宰相中君のゆきもやらず常の方へもえ渡らぬ也 白宮浮舟のさまよ〳〵の形時也
○あまたゝびあれど 巴故 中君のあまたゝびあれどもえ
うちとけなどもあらぬを

○屏風の後よ 宰相 昔ハ袋よ〳〵といふ

○うへ人のもの 細 常よりこゝハ道ゝそもなきさと尺
今うき舟とゝまりぬるとそ 障子一間あるそう也

○右近とそ 宰相中君のさぶ女房と尺以後ハ浮舟
のさま有人ハ別人ゝ

○足うしを 巴故 あかとうまつりてなんとのさまにて
のさうしをとゝまりてよとゝ也ありてそいふうしろ〳〵

○ありそさゝ人 河 物ありそさゝきをゝさを云也
宰相 ありそうしさ也

○ものきこえて　巴抄　乳母の詞
○見ぐるしくおいなりて　花　見ぐるしげなる心也
或抄　須磨巻にもあり　詞也　困字也
○きいのもしらぬ　一万水　白宮のそれもまたしたと右近
の詞
○さよいと　或抄　右近詞
○右近ハいはぬ　或抄　是も右近詞也右近ハ白宮ハ
やうし中君へ思ひてやらんと

ものきこし給はんぐらにいとあや
しきとの給ふおほむかへさまへおぼし
てすんなることさ給ふでよみんなるに
ごうとてさぐりつる御うらなき
すぐるわりやくのはとりくくりて
くてうひふしぬべきをとかいの
うゐ御き涙と皆りひかりなゆう
女ころあく世て有金ぎさ
こしをそくうきいはだにて
見ぐるしきことも侍るかおを
らうふかきこときせんはまいう
ておまへにてそいふあびてゆゑん

○くさまれもく　或抄　中君のことおもへるを云
○あさましきさまで　或抄　白宮心浮舟の躰を云也
○心つきぬるを　巴抄　浮舟の躰也
○さねそうう　孟　浮舟のさねそうらに躰なれハ
白宮の事をおもひ出しくハてそハすくさむる也

き世わたりてうつをおさまほしく
くさまれもく御身へどうぞあれ
おぼ給ふあさましきさまでおそ
よ御心き人のふるとわぶ人ゐるを
宮近ぐらつるなきもいとそ
るでのいましはわくさあり
と心ろえぐく御ぐされてとひ
くらひらくるへこころつきぬ
ぞよなきをだそもとそてなき
どらぶれしうつぐり御へる
がひとおほし出るかなさもおもひて
ら給。右近ぐまかくもぬれおう

○まさいの心うさ　細　中君の羽

○いとうさうさん　或抄　中君も白宮ゝおくさやうさ也

○れんせるれハ　或抄　あやしさ人のゆせるれいにさこうんと也やうの文法不くはあり

まさいでおほしくらかりそめんとものたまふをいとうさうさん
とさのみ心ゆるしもしたまはぬをいとうさうさんとさのみ心ゆるしもしたまはぬを
ろうたしとおもひきこえたまへるさまのいとうさうさんとさのみ心ゆるしもしたまはぬを
りんとすんでうつくしうおとなびたまへるさまのいとうさうさんとさのみ心ゆるしもしたまはぬを
うちまもりたまひてあやしくおやの
さへ人のゆせるれいにてこうさうさんとさのみ心ゆるしもしたまはぬを
うおもんとおもひたまへるよりもいとうさうさんとさのみ心ゆるしもしたまはぬを

○おとゝもう　河　おとゝまうさ也　そとも同音也
乗　おろうろしさ心也
○つとろひて　巴抄　浮舟よろひてのうさと近
と少将しうと也少将も中君の女房也

おつろひもてゆくにおうびたらでまさ
しうもれ　はさそらのそまりう
そまうう川もうおづくれまう
りつゞくさやりのうつまでおも
おとふさうさていおほしうらでこ
よ　四うさうさまうさてたうめこのう
だれうさ四のうさうさ四うさ四
とでこまうさでくやりうさ四

心ざさゝりの 弄 白官の海舟の方よ入ぬるまゝ
もとおりの中宮のいるやうにおやの世
のさわよ心ざさゝり也とさゝれて右近うひるまゝ
未の刻よ今少あるまゝにをよいて真實ん
ざさゝりとゝよゝあゝを

○いとさゝゝゝさ 或抄 中君心

○我あるうとさゝ 巴抄 白官のるゝハ中く中君を
心あるゝゝハうとゝもんとゝ

○まゐりて 孟 ハ使のうゝと右近うゝりてゝゝ
也

おうまゐすうゝゝよさゝ右近ん
なすきゆうのいるやうにおやの世
んゝてゝろおゐでや今ゝうゝ
くもあゝでよをおこゞゆゝゝく
あるうかおゞやゝなゝゝ
いつゝだいるまゝゝうゝゝゝゝゝゝ
てさあゝうさをゝゝいとゝさ
うくさゝんのいかとおゝてあゝを
すゝゝうあんゝゝゝゝ
をゝゝうゝゝゝゝゝ
まゐりて孟ハ使のうゝと右近うゝりてゝゝ
也

○れうまゐり 或抄 白官の羽使ととゝゝ
也

○平重經 孟 中宮の侍也

○うゝりて 巴抄 海舟の方近く中宮のハ使とうゝて
白官へもうゝゝとゝゝゝ也ゝ次ゝゝゝゝ右
近うひるゝ也

○中つゝさのゝや 弄 今上の御ゝ

○大まハ 弄 中宮の大まもまゐりつゝとうゝ也

○ハ車ゝ出ゝ 弄 中務官ゝゝの系内の車ゝを
ゝゝゝゝ但大まの車也

ゝゝさゝゝゝもあゝゝゝ
よゝれゝまゐゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
すゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

○きよ 成ユ 或抄 白官の心也
○人のおかも 或抄 中君也
○あらゝかさ 細浮舟の心也
○うろ〳〵住居ハ 或抄 乳母の初
○そうろうさん 盃 いよ白官とやうにとやうれず
いふこと 或抄 中君のおかさん不あれハ也

也ばぎよはゝよとさぐるあこ
よりもやうくもあるをとゆが
ものおかも或抄中君也
たおくなうていぶかうみ
ちぎうをきていでまいる
おろうさ与のさうろやう
してお母かをらしてう
ぬうのうちあつぎをじ
てぐろはとまゐるづよつを
てづまうびんあうろうく
おうろうくさふさまた
うぢおおろうやぶうおさ

○ようのさうれ 盃 ようのくうれとも書
兄弟そうやうのくありていふこと
○ううのさう 河 降魔相
花 不動尊うのやうよ念怒の相と顕しうる也
○手といつて 弄 乳母の白官とまりうまうよ乳
母の手をはうぶしこと
○うるとくの 弄 もうるくての人れをさうのやう
と宮といふ也
○うのうのよハ 弄 常陸う家のう
或抄 是ハ乳母う浮舟ようう語也

くこさうのやうのおうれ
あうさ思いてわぢさやうに
ううのさうふれさんくはん
うこもあうこもばよ母おい
あんまもうこうこもこく
思おくてぢのさうをいぢて
けこくさんまうつまこばいむく
はまくぢもくこさ母ぐ
てよとこいつまも母のつうを
うとくのをさくぢていこうし
くもおばこおつまうのこのおい
きぶをいそでくいさうしおいて

○もろこしの 細 右近少将也

○ゆきひめ 弄 常陸うね方の浮舟とりひて譲居
きこえとりしこと也

○もとて 此少将 細 此少将のもとへまゐりつかう
ひを出すをいふ

○うちなびき 攻抉 乱也

○君ハ 細 浮舟也中君のいふよりおもひとりたる也

○いとゝろ〳〵と 或抉 乱也

○こゝろかく 細 乱也のこゝろありていふ也

おろ〳〵ごとくの浮舟へをこゝろひおとりてまもりもとゐ給ひそこゝろまでのおもひ給ひ
とそこゝろまでのおもひ給ひ
乃ゆきひめの人ぐをとりこゝろまでのおもひ給ひ
までぎこゝろまでのおもひ給ひ
まゐりいるおもひぐくこゝろまでぐ
このかたのきみぐいとあいぎやう
なくばかりおもひ給ひこのあたりのことを作り
ざこゝろぐらくやすらぐず
ものこゝろいかりくやすらぐず
らうふこゝろのきみそおもひ
まぐぎよのとをぐおもひ給ひて

いあゝきみにぐしの御心もかくもおもひいろぐこゝろれぐこゝろいぐ
もたゆかぐとゝおもひ給ひ
てぐふうかやぐとゝおもひ給ひ
んとゝこゝろぐありぐれ
こゝろのおぐいたりあこゝろいを
ちぐふ心地れぐこゝろいとやと
まにくまんこゝろいこゝいとやと
しぐもくもしきりおひいでん

○くろせの觀音　細　長谷寺の利生をいう或成就不成就をいう玉くしは利生成就此海舟は只今やうをもちくさる也此理をよくせんさく也

○ふやいそさ　細　白宮系内あり

○うち近さうさ　舟　内裏への路次近きさうそこを海舟の方ゟの門より出る也

○心ぞんある物ごと　或抄　まの詞よ宮もありてもおもふ心ぞんをみうそうさ口もさいおもひーとありまうの古哥をふくし是をはまてうそうと是

○うろー馬　河　鞍置馬也
花　移の鞍をさする馬也

○えいとおもく　細　中君より海舟のうえ人まうせる詞也

○こうひい　或抄　内よりまうり沿て退出おもしよと

○小もろの名殘　河　洗髪後首風發　醫書添ニル

おかしろもうものとあてよがうり
ありおくさこそてこうぞくあるふろ
こそどもでおて。どござおやで
すぐろよどうくおがろ
るともいぐて。のみそ
ぬ人。衆人へどろてきうおん
いとおくうそありんこく
きうどうそおやなや沿
そまうおうおうこうひいお
海で。ゆすのおうやうち
もるやまそおおおおる沿
うそまうのもおがろん

○ふるう心ちの　細　浮舟の返る也

○さらうくり　或抄　又さらくして　中君よりの給也

○るすの心ちして　或抄　又うき舟の返る

○めまうろき　河　瞬

○さくくいてそ　弄　中君のさりいて給ふ也

し女房のいつを中君のさて何とうくいとおく

ふ給也　細　うるうりハ草子地

○うくくうくく　細　句宮の性といふ

○ちうるる　河　不實

○此君ハ　細　某の性をいふいハ出給ふそして下

の心ハ恨のあるをいふ

○いそそうし　河　心ハ下ゆく水のうきうきといそ

て給ふそいふまうおろ　給ふるいそそそよ

やうふへき我とひとうくしるをれい

○あひるる給ふる　細　浮舟某の人よりてか

くせハ此るくうくさるとく

世抄　句宮の不慮う浮舟の給ひまんとく

○世中ハ　或抄　世よりもりのうるきいあしとく

○我身のありさま 幷 中君の為ハ子細ありそうにそ

○それを 花 不放将心也

○哉ろうと心 幷 茎の中君よの語ひうるうをとむつかしく思ふ也

○此君ハ 或抄 浮舟也

○てたとう 盃 さすそうそうて中君へ出すあるとそ

○こうさのさうし 幷 中君の方ハ右近とよひて乳母ハりうも也 已抄 乳母中君の方へゆきて也

○いとあやしく 盃 乳母の右近よりうも同也

なりのハあるこそいとうしろめたうおぼゆるものかなとおもふ事のありさまを細やうにそ

○それを 花 不放将心也

○哉ろうと心 幷 茎の中君よの語ひうるうをとむつかしく思ふ也

○此君ハ 或抄 浮舟也

○てたとう 盃 さすそうそうて中君へ出すあるとそ

○こうさのさうし 幷 中君の方ハ右近とよひて乳母ハりうも也 已抄 乳母中君の方へゆきて也

○いとあやしく 盃 乳母の右近よりうも同也

なりのハあるこそいとうしろめたうおぼゆるものかなとおもふ事のありさまを細やうにそ

○それを 花 不放将心也

○哉ろうと心 幷 茎の中君よの語ひうるうをとむつかしく思ふ也

○此君ハ 或抄 浮舟也

○てたとう 盃 さすそうそうて中君へ出すあるとそ

○こうさのさうし 幷 中君の方ハ右近とよひて乳母ハりうも也 已抄 乳母中君の方へゆきて也

○いとあやしく 盃 乳母の右近よりうも同也

○ゆるす 幷 浮舟の實ある心をもてしく
しくそ語る

○いさゝかなりとも 巴按 うき舟二而世ろなく
あるといふ也

○我うへを 或按 浮舟心

○ゆかりとさ 或按 浮舟大やうもとさる
とろくしくもてなす也

○えと 或按 中君也女房の心也

○これよあり 細 白宮の心とある説ハ
よろしからす

○ねすハゝり 巴按 右近女將也

○ゆるしてハ 水 浮舟の右近をもうちと
てハ云ふ説ハあを中君ハれ男ハそハえ
説ふまし

○ものゝうらいと 細 中君の物うき也

○例うを 或按 是ハ中君の判

をしいでゝもてゆくほどいふ
ばかりのいとゝめもとゝまるをも
てうらてゆのうちかゝやきおはす
人をどのみてまもるよ
をゆるすもハゝりとめてふ
こと也てよおばつかなき海
をそるゝといふうちんしいとる
めをどにおばつかなしゝめ
しあけくれもとゝめよう
ゞおもへんそおもへハ
ものもいはてゆくしめさ

○いとよく　巴捨　あの君よりよく似ること

○ひとりの恋ぢ　細　大君の中君をおもひしやうに

○年ごろいと　細　海舟の約

○ひとり　孟　物語繪也

○さうまうと　或捨　さてありたしと云ふ意也　中君の又人ゆるめ也　以下中君の心

そらおぼれするものかな。こいつぁ巴捨あの君よりよく似ること。
このあざやかのおもかげどころか。
のちびとる女おくいやだ。
もうめんどうのさきそう
してもとふいとうやしき
へうつりとふ。ひとりの恋ぢ　細　大君の中君をおもひしやうに
むこうてわかれるのをへ
りのさみしさ。この約束
ありやさだいとうまく
ゆんでこうのおでいとも
つまりてきらびやかふ。
いうこんこんとりかえて。年ごろいと　細　海舟の約
いとよろこびありひきこし
をもてよおくかえてもうこ
おあじものなくもむこう
ゆてうんとそうにいとうび
うこわってあ。うあぐ
いぞをもて。在通よこばをも
てかえまつよ。いものてものち
もえこわへおをす。こうはま
てかえまつうる。こうあて
とうのうもうおく。こもうみ
おうをおう。いこうまこと
うかうこうていこあと

○あそさハ 花 あそ〳〵しさ也
或抄 上らく〳〵をそるさ心也 尊貴也
うえいてとるとも 孟 中君の浮舟と見給也

○ひめ君ハなやの 孟 大君ハ宮中君ハ母上に似
給と皆いてゝ

○きゝ給ふ人ハ 浮舟のあね君に似給へるとや
めでいふ事也

○うきハ 孟 大君の躰といふ

○これハまろ 孟 浮舟のる也

○ものそゝろの 或抄 中そ生長し給つゆへ
なるへしさ躰と

○なとゝいふあるうるさ 或抄 大君のる也

○いとゆゝう　巴投　八宮をゝ浮舟の心也

○ゟゝの心ろり　細　右近少将をゝ

○いろ〳〵おかしと　舁　浮舟を中君の念比よりおもとも自宮の心ろうをハひきさるゝゝ人しといふ

○ゝもそゝろおもてゝ　細　實事ハなきさうと思ふ

○あひてもあくあ、河ゐをかしもるてあをろう

葉のよハあひてもあくあ心ろうをもれ

細　ゟゝよ心ゝあるゝをゝ浮とあり也

○いさやとゝゝよ　舁　又ゝゝを自宮のゝきと殊更

よあひてもあくあ心ををんし浮をんとゝふく

○ゝもあろうふゝ　細　ゝゝあくゝゝろうあひ

ゝゝ

○ろゝくと　盂　白宮の浮舟の不入好ゝるを

ゝゝ

○人もをゝゝん　良投　中方心

○さうしろを　細　中君也
○くるもちの花　くるもちとはいるるを
上らもちゐるをいふ也

○あやしく　細　女の詞

○いくたちの行ん　河　鼬のまねをとゝるをいふ
つるさ心やや中君の返事をうしろめたきをよし
きこえんよりれまねをとゝるをいふ
花　鼬のまねさろ〻貂誹と云る有てんと云を
ハ鼬のまねさ時よかろうと云常陸のお方浮舟君をいう
ようもちゐていつり心ハ此人と宮〻仰方のあつをなり

よりひやうしんさるじこまいて
ゆびとつさうこゝろもちのよう
こゝおてべりおさりのるうと
をうがこゝろなしよおいて
しくなりのおてみゆるこ
つまあこまつまこゝばこゝろ
やとてあやくこゝろかや
ぎのうくをまつ女とゝて
ろやまくいふのこまこゝまか
がくいこゝちのいんやうゝ
乃しいまばうこゝろのごまふ
まうこゝうみこゝ也いうまし

中君判

いとさいつゞらのおこゝろのぎさ
よハおうこゝあるをこゝうこゝろぎ
ようまうこゝぎこゝろこゝまうまで
こゝろこゝうまおとてこゝろの
こゝうこゝろこゝぎこゝろのまをを
ろうもこゝろのおこゝまくこゝ
ぐゆこゝふゆこゝとんと
おりこゝえもうこゝでまこゝぎ
くてこゝぐこゝろのふこゝぐこゝの
移こゝろのこゝろこゝてくこゝ乃
こゝまくゆんものやまこゝゆ
ぐこゝこゝまんまこゝろ

○心のおう〻　細　女の心也

○くてこゝうひ　細　女の詞

○梅さく山の　花　みさをハ松のみさをといへるやうに
よろづの心をいふ
細　まへ山里よもるうぐひすのわれうたせる也

○こハ何るう　細中君の詞

○もゝしきもゝち　細　白宮のいる也

○その心を　細　さやうのことも皆心つひせハくろうろまでと

○さうよの心ハ　細　母の詞

○ふしぎなりし　細　浮舟ハ故宮のむすめそといふことひくるまでハそのことにくるれどろと

○そのことにて　乗　浮舟の母と中君の母しやといふる也

○大ゝう　或抄　公卿ゐこの心也大やうよとうひろもちやうの心也大惣

○いとおしく　或抄　中君の心

○されど又　或抄　正躰なきさま也とかくさせる家也云　ほど半作なる也

○めのと此比自　或抄　母の詞浮舟よりいふ也

○さるまじく　万水　一向人々とりても有なんと

○此比ゆかりハ　細　故宮の御子にてますらしとひいひなちかへハうとき人とくへきおもすれと浮舟のまうを思てむつひよりなきハ又よひへうしさる此出来あらしと

○ことやうなる　細　人々しき家まてハなるまじきと也

ときこえて。いざなへいとや
くわいなさうざうしかしとおぼせ
ど。えうなかりけずおほさまし
くろうなうこともあやしうさい
きこゆればおほくのものきこし
でいでゐ。やすらひてさぶらふ
しおりゐて。ちかうさぶらふ家まし
きうりけり。家とさうぶらはせ
ハとうかゞふつゝきこえ家
なるまじバ。ちかくしきえつゝひ
もせぐなんおもほえおぼされ
このい君ひとをよろづよりて

なきときこゆるかほかゞるようか
おぼろかハおりしのびきよお
しもありけれバあつくさのハ
さいさふるよ。しかぐしうとぞ
へいぞおはさうざうかさいうり
てもぞ侍べし。このゆかりハ
うつくしきものしわたり
とびつびきよゆるよびんなき
こともいでこなバとくへ
かゝりぐしおちつかしやよや
かりともどうとなのもことを
どものいでおほせよどのづ

○あやこと 盂 浮舟の巻 鉢と舟のスそひて
みづ心あくれ也

○心ちすく 細 女の性といふ

○うの家うと 花常陸の家ともうそいひつくよ
しをくへきれと實のよともよをとそそれそめん
ういとあるさまくにあくうをしこ一ハ然也

○こハ又 或板 女の词也

○さゝしく 河 背司ニ
弄 雑事ニ

○とものへ 盂 番右也

○うこゝ也板 ひとりこの也

ともくに白くうまつりてんを
いひをそてこづくこうるん
とゝこゝとハこちなもて女よ
わんこと一ふせぞりあこう
らいつるまいてあくれり
ゆやてこまてわこしくおし
せいつてあて思ごみる
さんこうさこうこいさよ
よをそくよあくもくいる
れいこまんやとうこうり
うとこちおくあごいわへ
のお思こごちやそくりの词よ

○うの家うと 花常陸の家ともうそいひつくよ
しをくへきれと實のよともよをとそそれそめん
ういとあるさまくにあくうをしこ一ハ然也

○こハ又 或板 女の词也

○さゝしく 河 背司ニ
弄 雑事ニ

○とものへ 盂 番右也

○うこゝ也板 ひとりこの也

ごをそうわもうごの家うも
くろくこいをそうめごれど
ころくろくまんをとそそと
おりのくくろうよごうごろ
くこまずわるもこうのて
くふころごくつ
なもりくこうへ
てわやごおのころろ
ころんしおくごまよと
ものどもあてつひへ
とのへのこおごいのをそて
作もうろこれごうこふ

○こゝろ心　河　花右音モロ三　万葉
孟　世あるひとを八女の不知分也ひくらしと共に
そひたちう膜立也
○此人よ　花　此女将ゆくよ宮の姫君をともて
うつとをいつ也
○又すゝ早ふさ　或板　浅舟のる也
○うのそやの　花　二条院そ女将の直衣さして
うつろきさうそをそつる也
○ふさくりのよ　細　浅舟のひこまとく〳〵さの心ハ
早ひさまなる也

らぐらうとらるぐいとらう
しをれバとうちなもてくるとう
此わのわうひをハくとうもてくるさ
らのふりひいうぐてすうぐよ
さ海わくいしら海ぞとうふ
なりくうくいとうとうくこのん
よとうくうまぐれぐうわうぐ
うとみおくるさ乃ま此
バてくとうとうてなおくん
いまどどうのうやふまへくく
いとんぞおうんこしよおくく
やりのやてぐれバくうの

よおりひてバうまをおど忘
しとハやとおうとうてハ
いてうんゆうこぐおをうさ
海人なすやのてのぐよ
ゆるうこうるうこるさ
つうてのうのぐくうさ
ゆやのうこぞなうよいまや
いうのうちうぐいとうのう
をそてこのうの哉み
とそのうとそいぐうハやとう
いとさしぐなうハとうら娘
いとうぐうこのうよおおぐとう

○こゝそハいう〳〵　孟　女将の躰と女のうい人付也
○いつくうハ　或板　こゝそハうとうとうの也

○宮のうへの 孟 中君と白宮とのうまれと休よ
うなる也

○いとうるてやうなる 乖 白宮うせ女将とうとよ
不似と

○兵部卿宮の 或抜 女将ぬ司也後達よし也
細 白宮ぬあまうへうせ乃時のうをとし也

りのさま海てうしてう
ものうへのうとのてやせ
ゆき海どものおりひいづまでは
くらゐのまへどもやとうる
まうるどころよりあてひ
たづまてうらともろいと
うへやかりのかく今ろ
ぎうもの人とあをうのあり
しかとおりうとうへ
おりもいつとよ当ろのう
のとごのあをとよりろ
もわろかいでろうもわ

○とうあるさ 何うろんとうあるさ
秋萩よりわろうろもをうろ歳る
○ろうさ人 或抜 後達ととをいう

○うれと哥うん 孟 女将也
○いてや 孟 女の女将ぬるとと只也
也抜 女将心ひきうりうと
○いてさまいは 細 白宮のいまへてそれる也
○うとうひ 或抜 今哥うんる也

もんやるでねさしおうのいれん
かろとて一回まりてあうへ
かどのりしへえをそずうり
うさことにおしさとやの
うらぶんでうひとうへ
うらよん在てうまうでて
うとも高のみおうりいぞや
うろでもりかをりんで
へともねばでいでさへ
いてうおうもうおのおと
いのおろでとはずやうな
いてうちあどをうさ海なる

心ぞよ　細　女のさる哥をうたひやまう

○ありゆひ一哥　女也　花　故宮の姫君を初ハ約束
をかはしてあふ事のきこえくれいろ〳〵といふる
ろ落ようつゝ下ろ〳〵と女の中将君のよめる
歟　ありゆひしゝハ領しゝる心也
○いとおもく　細　女将の心也

○又やさの一哥女将也　河　宮城野のしのゝ萩
露をもり又行をまつこと君をこそまて
宮さのゝこゝさうもしゝハ宮のまとをまもりハと
そへてゐる也
○いつそ又つゝ　或抄　此てうりハ対面そ口さん
と
○二人やのゐる　細　女の心也　さてハ宮のまと
いふをきゝてゐる

○あひるゝ　歟　あらさるまてといふ心なるへく
愛もなきよハうろ〳〵し　或抄　女の心也

○此君ハ　歟　芝のゐ

○いうをれ　歟　いてもうさ心也
或抄　一説かくろの心也
○ひるさんハ　細　海毎也

○ゐろこものゝ細 此女将のゝ也是を我物とせんと
ねらひしもくろおそろしさよと

○心よろこびて 或板 汐舟のゝみさを

○心とゝめて 細 芝そゝ也心に成就しそこと
孟 世ろとりしものハてこと

○ゑんとをさ 拜 芝の女二宮とをもふゝゝ

○をのゝをるゝと 万水一段もとゝめてをのゝをるゝ
なゝてハ此心とゝめ給ふこと

○世の人ゝ 細 公勇といふ人の品ゝゝろとい也

○ゐろ子ゝと 孟 常陸ゝ子をうゝそゝろ汐
舟のやうなるハをさいと

○をゝこゝろ 或板 此将と白宮よゝゝ人ゝ
てゐろ人のゝゝとゝゝこゝろ也

○ゐゝゝ 孟 芝の女二宮此ゐ目ゐろよいと

やうしまろうしやうあそあるゝゝ
まゝこゝろのてゝこゝろもこゝろも
あるべきものゝゝろゝゝこゝろ
をゝんゝろよゝこのゝみようゝべや
あるゝゝあゝとこのゝゝうちゝゝ
ゐゝこゝろのゝやりでもゝやよ
ゝんゝべそまゝりゝいゝも
ゝゐゝゝゐゝゐそゝゐゝ
ゝゝべの所でゝこゝをあを
えんそゝゐゝゐゝんゝの所ゐ
ゐゝまいゝものゝゝゐゝゝ
ゝまゐゝゝりのゝをゝゝ

○旅のくるしう 細 三条の家也

○あつまこと 或抄 ものもろ人も皆東人也

○くれくし 弄 心のくれ也

○ふやの人は 或抄 中君の事也以下浮舟の心也

○あやうくもち 細 匂宮也
或抄 浮舟後よ匂宮よ心をうつし世初と心の
うつるや

○母君ろやし 花 河海云やし 屋戸宿也古人注歟
但猶不得其心猶可ろ簡ニ 今案宿の字ろ、ハ
三条ろうの母北私北やうと云てしてこよ浮舟君
の居所へ北ハ母君のくらう此宿へ衰ろ文を
せろと心得へし 細 屋戸と云説有ニ難用也
ろ簡よハやし疑ろ心也母君ろやしハ此母君方を
早下ろそあれと今ハ本の母よ成て親ろもて文
をとくくと

○をろろを 細 浮舟の心也ととろもくろ来
運也ろ念比ろ事へとととと

○いとつきく 弄 浮舟の母北文の初

○つきくハ 細 浮舟の返事也

○ひさ堅き哥 浮舟也 河 世中よりねぶかくとをくうらみ給ふ拾遺
てうふ年ふりてうつろひたる花にこひしたひてをる人をいかゞはせん
いろもかはらぬ 細 うとましと一向に浮世の外と思ひ
しみ〳〵 巴秋 こゝもさ京中をはれ山陰なと云心

○くもとり 孟 母の心也 河 迷 放拍

○うき世よハ哥 母也 細 いろ〳〵ふかくとりあつめて
浮舟をとくめでるやうのあハれ我ゆへハいかやう
うとましからん哀るゝ哥也

○うをとくしき 細 尼君とありのまゝよりあつめ
なをとゝしといふ字哥をとりいれ用意ふかき
母也やうの不審ありと哥をハいはゝ沉吟也

○物ともをれ哥也 細 大君のこと也

○こゝろえハ 孟 卅度也

○むつかしと 巴秋 八宮のおもかげしのびのこえの
こと也

○こぼちてむ 花 故宮のおはしましし寝殿を
つくりかへらるゝ也

○ゐなかびの 河 僧坊具

○山里めきたる 弁 八宮のおはしましし時はたゞさ
びしきを今はさめざめとさまかへ給ふ 都の住居ぶり
は山里めきたるべし

給はんとてさいくたりもたら
やしきまてつかうもなかめ給。
わたりし御忠にしひはいとそ
うとましくそいまにうるさと。女
しく御やうかゝてさなう
おほしとおほしひやうゝうゝの
わたくしのおはしかの御ゆの
ろはゝのくらしてさふるを世
とまつやまさしめさるゝとも
とかさりたまふをみてはゝか
もこゝろかはとたまはゆへ
ゆへしきうつせんはべるに

○こゝろぬる哥 薫也 細 故宮の事也
孟・水ハゆかりなき宮のことをハ何とて人に知
らせんとて

○こてひたる人よ 或抄 弁尼也

○そのへんさハ 一本そのへハ 細 薫の詞也浮舟の
ことをきこえおくへし

ほとりあるいとふかな給ひぬして
まもらせたまへと
たえてぬる涙水にかゝる身の
人のおもかげをだにとゞめざり
きんさこそのゆかしさ弁の
わすれてのくるふさちなり給
（哥）はいかゞしらんとてまゐる
まつひとかむかしかへむよ
うちめよめるをいひてをなね
つま川おかそねゝかりしゝ給へ
こゝろふくろへてゆかりことの
ゆかりなくよりの人ゝさいさら侍

。うめくさ　或抜　草のこひちょうろぎ

。ひとひの　細き弁り羽

。いんちょうふ　或抜　方くさ

。あやしさ小家　孟三条の家也

。うこうと　巴抜　宇治へと

。ふくめり　細き草の羽也

。ねりうり　何　難舊
或抜　此字治をろうりと云ふいふかしの契り

。さうはうの　細き草の羽也
或抜　そのか家へと

。ろうりやハ　或抜　兵ハ出京ハせるやうと

。あかせると　細き弁り羽

。ろくろうよ　或抜　中君へまいるのかと云
京ハうるやうと

くそるんとおもひもさだめず
乃くおもひうりまあるうちう
まうしてもうでくるほどはなし
ぬ。ささうはうの。ろうりやハ。
あれよかんとて。きのるそ
ぐ。おもひ。ささうはうのこころを
うんとうろよ。やそうちへ
ぐうやうでおもひ
のおもひで。ある世ごとをはん
ぬんとやすらはうまうす
をうんぬんとハものうて。
ぐうおもひうりまうてこそ。

○すてゝう　細　業の句
○おこなひも　河　愛宕聖者空也上人事也彼山縁記曰空也上人於清水寺發誓願曰念佛行何所ありて慈尊の出世までいつまでも相續の霊地ゝ人ゝと祈念せられけるに観音告給く愛宕山月輪寺ハ是補陀洛山同浄土也魔界断跡聖衆影向之所也於彼所行を可始之由有夢想仍彼山にして多年練行其後於洛中念佛行を弘通し諸人を度せらるゝとぞ　取意略抄
花　杮本紀僧正真済愛宕山高雄峯にて十二年山を出ずして其後嵯峨帝其苦行をほめ給て内供奉十禅師に補せらるゝをいへるや
○人もとるも　河　衆生無邊誓願度　四弘誓願之随一也　花　人にもとらるゝすなはちと何し[illegible]
○きいすると　細　業ハよき物とえらびての給ふ事を[illegible]人也
○あさてハうり車　巴抄　近車給らんとし
○その[illegible]の木　或抄　海舟今居小家の木也

○ゆめ　河　奴力　努
○ひつまき　巴抄　門さ人のまめつ物也
○まろうし　或抄　弁尼の心也
○あふるゝ　細　奥もする也
○さてハあ給ふるゝ　或抄　弁尼詞也さあつハ心得しかるを領状しける也
○ちかうたかしまに　弄　業の三条宮より東屋の宿に近きれハかういへり　或抄　近日あまる文をつかはされし也
○ゆりえへ　巴抄　まさしあさてまうさうしをいひえんかとするよし
○いつさめかや　河　伊賀部也 中媒之事也 [illegible]又云　伊賀刀也 孰云也端之 刀廿ハ疏也　斎宮寮部也是疏也　一説伊賀

あぐてこもくもへのきて侘
いかれわがおこなひのはてに
ときこふるうしひてなげきや
ありきるかうきちりのきかう
てへのひびをそて給らんれ
なりしうるかしの給てん金[illegible]
こも作られよきしかさて
もしれぞまそてられしから
ぞふ給りたれどぞをよぎ
おくるをしきつかうずしかぞ
あさてたりらく囲しそすみん
うのしびの三ろそ見をさま

ゆめとかくしらぬかみそさま
しくなるに我こそのほさしん
まづつまくらふおぼえとも
しるくておやなおつゝく
うちゆきわかかれバそのか
かくまたねもへきなかき
つら給ふらんとそのうきさるだ
けりもちりきかえてなかれ
ゆへおもとを見え出
ふるへきしらめそこへ
たるひのやまのかゝるらん
もいましふかいてかまやし

伊勢国よ八白狐とーうりゃれまくしと云ふ下略
花青表紙云未勘ふ土佐日記やうのひらがなの中よあるらしくめといふ人のよろづの
うた共を君やうとうらゝめよ此うち打待をうたふ
うたふこゝろひのかうさのよいうたを序ふうらゝ
やうひのかうさのついてうたうたゝ又とこゝろといふ
物語よあるまじうやうも人の祈ふうたのあり
今案いう我うたふうたふし国くよ有るや
○人の物のひうそ 細 業の性奇特也此巻の發端
よりくと山と金ふるかりき此心八有るうくをろも此
心也んのあり八常陸守といて
○うらうらひて 細 弄也

○ふやよりんせ 弄 廿二宮也
○うひなうさやうよ八やそれとも
いまうれくしくいはうら也

○うらうらこの君や 花 うら八内裏也業八内の侍
むこうれいふくしうをおやめくしうくしく
或抄 平人のおやのうくしうくしく
○入道のふや 細 廿三宮也

○うううく 或抄 業の廿三宮と大きよいふ説ふと

○ふやつくよ 弄 廿二宮と有くようりくしの
へさうれいふるふいしこ心と宮つくといて
○じつうさ 弄 浮舟のるれ心よりる也
○のふーまさ 細 あるそいふうとのふーりの早と
より宇治へうらうふつ

○うーうひ 阿 牛飼 應神天皇此時始ふと

○さゝのりのこと　弄　庄也

○つをさゝ　弄　付らく警固せらるゝ

○うゐと　細　必弁よ出京せらるゝ
取扱　弁ら心也

○いとつをく　取扱　三条の東屋也

○きろく人のやと　取扱　案内者あるくし

○やーさ不る　取扱　浮舟の心

○あねくみし　取扱　八宮の北のうへのありしく人也

○衰へ人それと　細　弁う釣也

○うの宮うへ　細　白宮へ也
孟　中君へ也　芸のこうくありそうやとも

○君も乳母も　孟　浮舟も乳母も也　葉へのる也

○ひらうなる　細　宇治よりといへるせなり

○さうやかん　弄　葉ハやましとおもひしく
或抄　弁ハ葉しりて門をあけさせたるを

侍らめどちの文ならぬのくおやさき
まぞの給ひしかば思ひ給へ知と
しているんとさもがなもあるを
もあざくしとおんどさゆのとて
しんの御さ見なすまじかられ
わさまかの給へんもおくるまき
るれどもはるふかくゆがなるべ
うるんとれがりひもかうず。い
聞るるがたふからかん人ききを
りそうざしさのびやうおおさて
くぎらやあらんと思へば弁あそなさ
これだらう思ひぞ知らぬるか

○あやしく　或抄　浮舟乳母なとハあやしくおもへ葉
とハおもひよらさる也

○近ちかさ　或抄　宇治よ近き山庄也

○らうなりきうと　細　葉なりと誰もしらさる也

○ようゐもなく　万水　儀なくて用意もなく
こころのうちのくしさいをひきうくる也

おやしと思ふにおぼつかなくなり
さうやかんとそこのちのさき
見ならうのあつかりのかのうとさ
をとまのひきれんとどちらかる
ぎりいでくりおもひともくら
らくはうせ見しひやうある
いらていひちろどかりくれば
うふらかりとてまへあくころ
どきちさいとつきがとれひ
おりまゐれがらいかなくあやし
さよせくにひおつかながたれば
こころさうざらいふなり事か

○心やましき事 或抛 恙の涙毎日入阪羽也
細月比の心ならもいとゝ〳〵

○君ハるゝをよ 細涙舟也

○ちはやぶる 或抛 乳母の羽也

○うのこのよとて 手常陸う中方のう

○うめくゝ 手 弁尼羽

○あやしきさまなる 或抛 東人の老也

○夜行 阿々顔巻よあり やう家の子をやく
ろも此中納言家持るといつり初る鳥うもと以毎の
ろつりこいやうのさきよりこやくつをこせ源順
也抛 宇治よりといの辰巳方初ろ〳〵
○此人の出車 巳抛 車といろく出そろて門をせ
とゝ
○うるさの 巳抛 権門の内衆悪事もろ〳〵

物ときこしめすらんいかゝ
はらべくもあるをやまだ
こころのどかにおもひなして
ろもあれば人のゆるし
てうちもねでなどかで
あやうきまでいたくふかし
月あかゝりけるやとみて
更行ままに月のいとゝ
すごうさしてやうの物とも
人めもうるさいとてやうと乃
人ゝもねいりてよろづ
ことしづまりかへりたるに
ひとりおきてあるもの

○むくむくし 孟 不穏の心也 おそろしく思ふ也
○さのゝわたりに 河 くるしくもふりくる雨か三わがさきさのゝわたりに家もあらなくに
○さとびたる 細 説ゝあれとも只山里びたるか あるじのこゝろなるべし
○さしとむる哥 業也 河 四阿 新猿楽記 阿屋 順和名 四屋 同上 東屋 催馬楽 庚令云 宮殿比四阿 弁色立成云 四阿 両下 阿都麻夜 麻夜
細 久しくまたせ奉るハさしへだつる人もわろきと也 我たちぬれぬといへる催馬楽の心もある也

あへるもむくむくしくきゝならは
ぬ心ちし給ふ。さのゝわたりに
家もあらなくになどくちずさびて
さとびたるすのこのはしつ方
にゐ給へり
さしとむるむぐらやしげきあづま
やのあまりほどふる雨そゝき
かな。うちはらひ給へるおひ風
ぞいとかたはなるまであづまの里
人もおどろきぬべし。とざまかう
ざまにきこえのがれんかたなけ
ればみなみのひさしに御座ひきつく
ろひていれたてまつる。心やすく
しもたいめし給はぬをこれかれ
おしいでたり。やりどといふもの
さしていさゝかあけたれば。ひだの
たくみもうらめしきへだてかな。
かゝる物のとにはまだゐならはず
とうれへ給ひて。いかゞし給ひ
けんいり給ひぬ。かの人がたのね
がひものたまはで。たゞおぼえ
なき物のはさまより見しより
すゞろにこひしきこと。さるべき
にやあらん。あやしきまでぞおも

○ひだのたくみ 河 たくみなる物ハひだをとりてこれをいふ なるべしのさま一をいふ
花 飛騨の工ハ番匠也 惣名也 やりどのへだてをいふ
或抄 業の詞也
○かの人がた 細 大君のかたちにゝたる人の形をしつらひ なり初ておもひそめしハ人の推し当る趣をいへる也 されば うれしきといひなしたるさま也
○物のくまより 或抄 初瀬よりかへさまに宇治にて垣間見給ひし也

○あくつもとり 花 ひさいことのゆえうつたえ也

○さくもろくも 枝折 物を賣そこの物を名のこと

○物よのやうなる 弄 思くしく物ろおもしさ也

枝折 ゆゑしき女の頭よ物をいてきしろ筋

○ひるのさのまろね 河東郡賣德詩 見花蓬轉知

車作とあり蓬葉車輪のまろきことくよゆくと

とぎこそこひおもひ人のきぬ

とらうびよおもひそそもとバ

かをそろもの世どもあのれし

おもひ人なでものあうわをあろ

こらすろようおもひなで

おもひらこころよおもひ

ものゝおのやうおもひこそ

もよこれバものゝでさろる

ものゝおのやうおもひこそ

もうもろうものよ

あこひおろみこらもおもひく

もあうろうのゝもでもを

ていづるをこと、おのくいて

おどもするをきてこまのて人あ

してろるはおもよ也をを

こまふうらぶそその世おひ

はこもくあやうおさ

こをありひさらぶて九月よ

もあうをこころのつぶや

いろうまぶこなぶバ居

こころもとくそくあうの

わろうてぶおれぶをのづく

○九月つこと 細螺 拳よいむ月也

○をのづく 枝折 弁尼の羽也

○花諸枝説皆蓬を車の心よ云ふ下略

花諸枝説皆蓬を車の心よいうたうハ車の内よ

れうし云へさうや総共董大将東屋そハ車よう物う

て女君とうちひさうへ車とさうの列へうろうた

をれハ車おう丸ねもろとハ乃て俗を愚意よう

簡一位ろの上の詞よ旅のやうハつまくて庭の草も

いてさ心ちをろみくありもろハ蓬ハて蓬生の宿乃

心そこをめめれて乃不一宿もろを蓬の丸ねと

いこんハうひ位ろまうさうや

いうて此一弄夜行せ人をハ朝あれハやとえ此

ろうろ人し大路ろ内へハよハ首へうと

○せちゑ　河　節分也

○こゝろえん　或抄　弁乙丸　宇治へ此度ハ伯とも申君へまいらんとて

○ささき　細　中君ないとやくとゝさうとまいらせ　或抄　差の心也

○これいのうまも　或抄　差の羽

○うへこも　巴抄　宇治よろづの人のしたく中君へ以後まいらせんとてやうもめんとて

○人ひとりや　弁　それそも浮舟の供よまうさんとて　差の字也

○そうとのりも　弁　侍従と弁乙

○ちゝきかとや　或抄　三条宮へいさゝひきとて　宇治へ也

○かうさうし　花　法性寺ハ負信公建立ノ所ニテ尊意座主ハ負信公ノ師祖ニテ法性房ノ名ヲ取テ法性寺トハいへる也

○ささき　細　侍従也　或抄　もろよこひ奉といへい物忘面世上の人のつゝ也　さて侍従と世のひくまうさもおかしくと

○君そいと　或秘　浮舟也俄るゝれ也

○いとうきに　巴秘　車石よりてうく(ゆ)也

○うちもの〳〵　乗　うちもの〳〵細長を車の中よ(へ)〳〵
浮舟と尊と(ハ)同方ニ同云男女同車の時定まる作
法を又あり母かゝるをと(へ)さてうばゝるを一答男
女同車の時或(ハ)物見るまの時まくの簾をあるよ
らつて車の中より帳の帷子をとらる也時と(ハ)細長
をまとをく(へ)きるや　細車の内よ鈎あり(ハ)此用也

○こ姫君　或秘　乗尼大君のまをもひ出るこゝろ
をとをもふ浮舟のことをとをるまゝ

えぞろよろのそまよ母中の
ほまーさもやぐぞ・きみで
いてわまーさよあぐで・
うつぶ外ろをいてうきな
つよふらうきのをとそいぐ
きみろう・すのくわうぐを・
ろう母のあるよ門ぐそてまへ・
まものやうふまーいぐくち釣日新
よあまぐさへいとそーたふくぐ
ゆうよつまをてこのうまれはとそ
まとそやうそもんそまろう
はべろうしおうまをおうのいそ

○物のくわよ　乗　此時あくのようろうねさと
やさしうるありを
孟　乗う尼そ同車さへいとよふよやうよ何
るまるくそ侍従うも也

○老うるのハ　乗　乗う心うねるをと(ハ)ふて老の
るひとのをとうよふも也

○君もろう人(ハ)　乗　尊の心也ろう人と(ハ)浮舟也

○きうう乃　乗　あ君のる

みるをもろうおとうるう
ゆぐそ・つ・むをもをてうち
らうさうてまをを給ふいと
まろ・ふよぐそ・ふよぐ
そのうろのうをぐふおりふ
よ・ふぐやうふやうるまとまて
おとふおりみ・おひうちのいぐ
ろうよるぐぐろうよあうるのぐ
と・そうそふうちりるりう・
まもろう人へかまうねぐえ
乃そまよ仕まそもまそこと
ぜうりまうそやまうく(へ)

○ふるとりの 枠 雙の直衣の花ぜうも眼の色
よりぜうひいろ也

○ねりものの花 車やう道の高き不ゝりひきく
あるやうなるをいふ山道なども有る也

○うちとけて哥 芸也 花 故姫君の形見と思ふ也

○心をあらせ 枠 此時をいふ人をさきるるを心
うきとおもふ

まくもおうちうちうちうち 或板 目霧うちうち也泪の
うかぶやうにおくれ給ふ也

神乃ちかうあづかりあづかやうに
のでうりせうが川ぎりめいて
ゆくのうまうまのるうよ山をそ
乃ちかのやうにうちうちうち
うちをやうくぞとうちうち有る也
ようまでおぼし入る也

うちうちとうちふつせてあ勢
あ乃ちうちせさまでめを神
うかとうちもあるどうり
ぎうちあをまでいぐわう

○我が身ひやうよ 孟 芸也

○いうちうちと 或板 芸の心也浮舟の何とうちう
りのをのひうちう
うかまうちう乃弁比 細 芸浮舟よりひきうかる也

うちうき人 細 侍従也

○さしろて 弄 扇也

○いとく 細 大君よ似てう

○あやしきまでき 或拗大やうもきさうろ也心のてう
てうれ不足のうろくしくきハ官のうも出来
ようろう

○いとくてこわい 弄 大やうろう也ゆ君のう也

○むうきそうな 河 古今 我こひハむうき空よ
ハてちのうしらひきともゆくうそのうき
○うきさ名 河 毛魂

○これより 細 大君ゆくと

○おくこハ 細 下車也浮舟女うちやきさ拗くきの
心うひをう落也
○女君の 或拗 浮舟の心也

○らうくようきうを 花 尼君ハうてれそハうりを
して廊ようきうハをうれう心也
○きさとうくき 弄 尼君のてうさようて廊よ
車うせうてうを此両ハ始終女君うて生くを
不うもあるを可有なのやうよ尼君の心つひをう
ようをいう

○女のはそもじ　舞ひおりゐる也

○ひろひ給へ　花　道の間ハ草木のそを分心をよする

○月ころのいとなき　細井なるの小家ハ月ころ見ゆる也

○しの八　孟　茎なり

○まことうあるあ　或抄　佛の荘厳いまこゝ成就せるを此まゝハ出よ又立てその成就せる今月吉日なれハ俄ハ出ありて次心もあるきよ又物忌をしてこゝそ見ひ出しおくれ八二両月八宇治へ追留しおくれと

○母こゝやうに姫宮ゝも　孟　女三宮女二宮也

○うちもも　或抄　茎のる也

○内おもて　巴抄　浮舟也

○女のはさうそく　孟　浮舟の用意の衣裳也

○ふえこゑあらし　細　大君の事也

○くんのまそれ　或抄　浮舟の事也

○ゑやのけしき　弄　廿二宮よりひき人頭也

○こゝのゑやよ　細　廿三宮の御方よ也
或抄　三条宮よ也

○さうそくいうそく　或抄　廿三宮へゑやつく人の事そハ又

おもるびらきすもらちけるぢ也
てんじやうのいとかえでとこも
けさうこのおてかる宿りしう
しのこ姫りひいぞらせてかと
乃する御つしごきがなどは宿
が母とおてかりこやの院ぐの
いうじめでたきかのも姫姫が
うらうと夕べ母か川ごの
るといかをそかあせんと
もらんでゞ宿まめくしをぞす
てのかにめしへせんもも(と)
出てきんかるべしおほとて内し

○こまかくて　或抄　隠　又如此

○こゑやの所す　孟　八宮の事す

○さいしてまを　細　此院のまをる事ハまし人
ても大ろへしもし

うもわらつるそお姫が宮姫じ
らう右んハおらかうんまゞらて
よくしてわらんとおのふも姫ず
かさうぐしるべおわれ姫が
えんこ御へハとつかすゞる
ひらし御へこゝ女の御方ても
のまひ姫て也しねゞるも宮
しこまやまらひたるづき
らまへどゞらてうまらまそへ
ひさらのそらゞら(と)きうぐ
しく御がとおやまうてうるも
らゐりしるすきいとまでぞへ

○そこらねらう　何不用
或物　大君のこころうとそよ心あさく物らうひ
うとて心申ひうふいうろよ用うろうへ〳〵
○うろうくと　或物　海舟八の中をこうろれう
やうのうハ不案内うんと云ふの心也
つものうんおかうびんがれ
うろうのてつもそてこうものこ
うんばこやうるうもうび
ものうろふうろうこ
おりひるうこうみうを
うんうろうんうこのこう物れう
こうこうてえ也でうこうとうら
物そればうろうもうこでこや
也うものてのうこうこうれう
りのよいこうこうてうまうう
うーとあづこうれあづ物
えそいこあつこうこうう

○ふやのうんれれ　盃　八官也

○むうこれう〳〵　細海舟ふ云の略也八官大君も
もうまふと時うハ〳〵

○うそこうふ云ふ　盃何そ心中ようハ〳〵

○白ふ江ふうさを　亜海舟の躰也

いとうらひ　孟大君よ仰ふる

○これをそ　取物　琴引琴を引物ろる有
○まろつまと　弄　あつまの琴を東のことよせて也
吾妻と書よそふるの也

○そのやまとこと　弄　大和詞ふるいて哥のる也
いて琴ふるいはゆるつまとこと和琴ふ大和縁有
取物　今こと有ふきんと筆とこまて是いつへ
きんふるのふるや
○いとうらふよ　取物　芳の心也　此返答ふらふ也

○ありかさねるふくし　也物　草子地也

○そふふの　河　班女国中秋扇色　楚王臺上夜琴声　順

○あのちをぬと　弄　常陸ふてあふくしふるひふ
井居しもふれい詩の心ふふろうねをいはふてめ
てふてのふふ

○さふいは扇の色も　花上の月よ白き扇をてあふふ
ふふふふふふ　班女う秋の扇い後のものそれ
ふふふと侍従いはひもふふて楚王の琴の声引
とめてふふ也

○ゐてゐれ　初葉の此句をうけ出し言葉
ゐてゐれ　其の前長句ありさうなる其一也

○ゐてうる　或抜　矣尼う老葉の名也

○やしなひ　盂　矣尼うさうう哥ありけ哥をみんと
それハさ物とうそくよ成

○やうく来ハ哥　矣尼也　河契前巻よやうく来ると
出を八木のりしるを出てうめう也
細　大君うそハるをれとと芝人のとり好へハ昔の
心の出来めうと

○やうく来ハ哥　矣尼也　河契前巻よやうく来ると
出を八木のりしるを出てうめう也
細　大君うそハるをれとと芝人のとり好へハ昔の
心の出来めうと

○くろうくと　或抜　あま君のうをといつれハ哀うを
之浮舟よ心のうろとゐうんうろうさと

○里の名を哥　芝也　花　是と前の巻ようめと
よ里の名と宇治をひしよ出せる也
細　里名ハ宇治也むうの人ゐあくやと
或抜　くさ多ハ昔のとうそ物とうろうせろハ浮舟
のう也

○さて　細　例の作者のう也

とうろうくうさうをくろ
うくもめくれもゐがされて
里のくもむうのぐよみ
人のおりうろうせるねやの月影
ほぐとうくれおくての
まゐ抜ゐんてうろ